
十四組の断罪者

マウンテンデュー（クロウバイツ）

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

十四組の断罪者

【Nコード】

N53170

【作者名】

マウンテンデュー（クロウバイツ）

【あらすじ】

学校で酷いイジメを受けていた少年は、ある日の下校途中同じ学校の生徒に橋の上から落とされその人生を終えた。気づくと少年は真っ白な空間に寝ており、神を名乗る少女が少年の人生を見てすり泣いているのを見付けた。あまりにも不憫すぎる人生に同情した神様はその少年を能力付きで転生させることに決めた。これは少年が楽しい（？）学園生活を送る、そんな物語。

主人公設定

名前 十六夜悠斗 アクトロー 験体名・異常性 一方通行
三年十四組所属 規格外

黒髪黒目 180 性格 マイペース 充てられた仕事は意外にし
っかりこなす。 実は面倒見がいい。

好物 飴 でっかい棒付き飴をいつも口に入れている。

家族は幼いころに発した悠斗の^{アウトロー}規格外性に恐れをなして悠斗を捨て
て逃げた。

料理は人並み。 ちよくちよく母である玲に教えてもらっている。

能力はとある魔術の禁書目録の^{アクセラレータ}一方通行さんと同じ能力。
能力が使えなくなったときのために空手や少林寺拳法など、さまざま
な種類の格闘技を独学で学んできた。 あくまで独学なので、実践
で使うと動きが荒くなる。

原作知識あり。 だが、時間の経過と共に忘れていき、学園入学時には
大まかな流れと主要人物しか覚えていない。 その主要人物ですら
うる覚えだが。

真骨頂 ? 高速演算 ? ベクトル変換 ? 反射

原作の羽みたいなのは出てこない。近所付き合いや町での評判は良好。

プロローグ（前書き）

息抜き作品二作目であるめだかボックスのオリ主チート作品です。
普段はネギまの小説を書いているのでよかったです。

まあ息抜き作品なので細かいところは気にしないでください。

ブローグ

日本の、ある地域のある学校。

どこにでもある極々平凡な学校。生徒たちが通学し、勉学を学び、友人たちと笑いあう。

そう、どこまでも平凡なのだ。そこにいじめというものがあつたとしても。

「アハハハハハハハハハハ！」

他の生徒たちの嘲笑が耳に障る。目の前を見てみれば自分の机には元の木の色が見えないほどに落書きされている。椅子にもそうだ。

中に入っていた教科書が、ノートが外に無残にぶちまけられている。その教科書にも、ノートにも落書きが施されている。

水を掛けられたのであろう、その生徒はびしょ濡れだった。無機質

な目で、そのいじめの実態を見ていた。

「おめえの席、ねえから！」

生徒の一人がそういうと、他の生徒からも笑い声上がる。その声さえ、煩わしい。

いじめられている生徒は別にこのいじめに特別な感情を持っているわけではない。唯何故自分にそのいじめを向けるのだろうと考えていた。

いじている生徒たちはその生徒の絶望したような顔を想像したのか、笑い声をさらに上げる。

その生徒は無機質な目で、機械的な動きで、教科書やノートを机にいれ、椅子と一緒に教室に持ち帰った。

教室に着くと、もう誰もいなくなっていた。自分へのいじめに飽きたのだろうと思い、机を定位置に直し、バッグを肩に掛けると教室を後にした。

下駄箱に行く途中教師とすれ違った。しかし教師はその生徒の姿を見ても何も言わない。

へたに彼を擁護すれば、いじめの対象は教師にまで届くと知っているから。

哀れむような視線を振り払い、靴を履いて学校を出る。

通いなれた通学路を一人で歩く。寂しいとは思わない。それがいつも通りだからだ。

そしてふと、橋の上で思った。

「何故自分はいじめられているのだろうか？」

そんなことを考えている時、体に衝撃、浮遊感が体を襲う。その時に自分は落とされたのだと認識した。

自分を落としたやつ顔を見てやろうと落ちる体を捻ると、なんてことはなく、学校の生徒だった。

そして激突。激痛が頭に、体中に走り回る。血液が体から抜けているためか、体がひどく寒い。

こんなときにでも、彼は朦朧とした意識で、唯「死ぬのか」と思っただけだった。

死に対する不安はない。唯自分の存在がこの世界から消えるだけ。

そんな彼が見た最後の光景は、落とした生徒達の狂った笑み。

そして、彼は死を享受した。

その少年が目を開けるとそこは病院のベッドではなく、真っ白な空間だった。辺りを見回してみれば何処までも続いている。

少年はいつまでも倒れている訳にはいかなかったので覚悟を決めて起き上がった。しかし少年が危惧していた痛みはなかった。それどころか体を確認してみると傷一つない。

と、少年はその真っ白な空間で何かすすり泣くような声を聞いた。その泣き声のほうに目を向けてみるとそこには自分と同じぐらいの少女がハンカチをかみ締めながら泣いていた。

少年はぺたぺたと素足でその少女に近づくと、どうしたの？と訪ねた。少女はハンカチをかみ締めながらその少年のほうを向くと涙声で話し始めた。

「何て不憫な子なの……。こんな人生悲しすぎるよ……。」

不憫な子ってだれ？とその少年は聞くとその少女は少年のことを指差して、

「君のことだよ！うう……。私神様やっててこんな不憫で悲しい人生送ってる子見たの初めてだよ……。グス……。」

どうやら自分のことを言っているらしいのは分かった少年。少年は少女が神様といったのに気が付くと、そのことを聞いた。少女はハンカチを仕舞い、涙を袖で拭くと少し胸を張って改まった口調で言った。

「オホン、私は君のいた世界の神様をやっているんだ。で、ここは世界と世界の間にいる神様達が居る場所だよ。」

へえ・・・といいながら辺りを見回す少年。少年は何故、死んだはずの自分がここに居るのか尋ねた。

「あのね、君の人生が余りにも悲しすぎるって他の神様から涙ながらに訴えられてね、私もそうだと思ったからここに連れてきたんだ。さあ、君の望みを何でも叶えてあげよう！好きな世界に好きな時代に好きなチート能力をつけて転生させてあげるよ！」

さあ早く早く！と言いながら手をクイッククイックと動かしながら少年を急かす。その神様を名乗る少女の『望みを何でも叶える』という話に少し考えてから自分の望みを話した。

「・・・え？それでいいの？だって好きな能力とか身につけられるんだよ？！好きな世界に転生できるんだよ？！」

その少年の願いを聞いて少女は焦った。何しろ自分の思っていた願

いは180度違った願いだったからだ。

少年が願ったのは唯一つの願い。その願いは、

『楽しい学校生活を送りたい。』

それだけを、唯それだけを少年は願った。

「うゝむ、でもなあ・・・普通の学園生活だけじゃこれまでの悲劇を相殺できないからな・・・。」

ブツブツと呟いている少女を見て首を傾げる少年。少女は何か決まったのか、勢い良く立ち上がるとピツと少年に指を指して宣言した。

「決めた！君にチートな能力を付けてある学園モノの世界に送ってあげよう！」

いえ、普通の人間で普通の世界でいいんですがと少年は言ったが少女はそれをガン無視。少女はさらに説明を続ける。

「能力は・・・っと、あゝあの世界って魔法とか無いからな・・・。
・・・うん、じゃあ君には・・・えっと何て言ったかな・・・ああ
！君の世界にあった『とある魔術の禁書目録』って作品の一方アクセ
ラレタ通行さんの能力を付けてあげよう！」

その作品なら少年は知っていた。学校では本などを読んでいると水を掛けられるか、ビリビリ破かれるかの二択だったので家で読んでいた小説だった。いろんな能力が出てきて少年自身もワクワクしながら読んでいた。

その中でも一方通行というキャラクターが気に入っていた。最強の名を欲しいままにし、性格は傍若無人、極悪で残虐。しかし回を追うごとにその心境が変わっていき、最新刊では主人公とは正反対のダークヒーローとして君臨していたのを覚えている。

何故さん付けなのかは分からなかったが、少年はその能力に興味を示した。何せ気に入っていたキャラクターの能力を貰えるのだ。ワクワクしないわけがない。

「君も気に入ってくれたようだね、じゃあ早速新しい世界に転生させるよ！」

そう宣言するとむにやむにや眩きだし、その眩きが終わると少年の目の前に巨大な扉が現れた。少年はその扉がその世界に行くための扉だと言われなくても理解していた。その扉に手を掛けて開ける。眩い光が少年を照らし、少年は歩を進めた。

「君の次の人生に幸多からんことを・・・。」

扉を越える前、少女の声がそう聞こえた気がした。

少年が扉を超えたその瞬間、ある世界、ある病院で一つの生命が生まれた。

第一条・・・なんでさ。(前書き)

あれ、そつえば行橋って男でしたっけ？女でしたっけ？

第一条・・・なんです。

赤子が元気良く泣き声を上げた。その赤子の姿を見て母親と父親が微笑みながら赤子をあやす。ゆらゆら揺れながら赤子は落ち着いたのか泣き止んだ。その様子を見てゆつくりと優しく赤子用のベッドに寝かすと少し離れたテーブルに座った。

赤子はベッドに移されてから唯呆然とした表情で天井を見ていた。手足を動かすこともなく、かといって泣き声を上げるわけでもなく受け入れられない現実を現在進行形で味わってますと言わんばかりの表情で天井を見ていた。

「あだ・・・？（どうしてこうなった・・・？）」

副音声で分かる通り、ベッドに寝かされている赤子は転生した少年しかし転生といってもまさか赤ちゃんのころからやり直しになるとは思わなかったのだらう、実際オムツを替えるときには羞恥に身を擦じらせていたし、母乳を飲むときもそうだった。

ふと視線を自分の服に移してみるとそこには大きな刺繍で『悠斗』と縫ってあるのが目に入る。どうやらこの世界での少年の名前は悠斗というらしい。苗字についてはまだ知らない。名前だけしか縫ってないので分からないのだ。

腹は膨れているし、オムツを変える必要も無い。だから悠斗はさっそく神様から貰い受けた『能力』の一部を試してみることにした。

一部というのは全ての能力を今ここで試してしまうと確実に親に不快感を抱かせてしまう可能性がある。それだけは避けたい。生まれてから間もなく捨てられてしまい、そのまま死んでしまいましたなんて冗談にもならない。

とりあえず悠斗は貰った能力、一方通行をアクセラレータ試してみる。しかしいきなり能力の『ベクトル変換』をする訳にはいかない。だから悠斗は能力のおまけの様な物である『演算』を試してみることにした。

まずはどのくらいの演算能力があるのか試すために頭の中で円周率を計算してみることにした。ちなみに生前の彼だったら精精いっても5、6桁ぐらいしか覚えていない。

「(3.141592653589)」

スラスラと頭の中から出てくる円周率。どんどん出てくる円周率にちよつと嫌気が差した悠斗は1000桁に入った時点で円周率を出すのをやめた。

想像以上にこの能力のスペックは高かったことが分かった。現に適当な数値の掛け算をしてみれば一瞬で答えが頭に出てくる。これな

ら能力の大部分を占める『ベクトル変換』の方も問題はないだろう。

しかし、問題は身体的な問題だ。いくら能力の『ベクトル変換』が最強だとしても、もしかしたらそのベクトル変換を破る奴が現れるかもしれない。そんな奴が現れなかったら悠斗にそんな能力を与えるはずがない。

原作でも一方通行は度々ベクトル変換が効かない相手と戦い、苦戦していたシーンがあった。それは一方通行が己の能力に頼りきりになってしまい、自分の体を鍛えるということをしなかったからだ。

だから悠斗はそんな相手に出会ったときでも戦える状況を作り出すために肉体関係を鍛えることを決心した。

だが、どちらにせよ今の状況ではベクトル変換も鍛錬もクソもありえない。いくら能力を使つたとしても赤子のすることには限界がある。それに小さいころに筋肉を付けると身長が伸びない可能性がある。悠斗としては身長はデカイほうがいいと思っているのだ。

とりあえず悠斗は急に訪れた睡魔に素直に身を委ねて意識を闇の底に投げ入れた。

悠斗の父親と母親は悠斗が生まれた時は普通の子だと思っていた。

夜泣きはするし、母乳も普通に飲む。唯一他の子と違ったのは昼間余り泣かないことだろう。

だから自分達の子供は皆と同じだと思っていた。

ある日、悠斗が一人で歩けるようになった年頃、悠斗はそこらに転がっていた鉛筆を不器用に持ちながらチラシの裏に何か書いているのを父親と母親は目撃した。

最初は絵でも書いているのかな？と思ったが、後ろから見てみるとそれは絵なんかではなく計算式だった。

計算式こそ簡単なものだったが、まだ数字も知らないはずのわが子が簡単な計算式を解いているという事実が将来の期待が高まった。

自分達の子供は天才だ。将来は大物になる。などと悠斗の将来のことを楽しそうに話した。

しかし、それは悠斗が簡単な計算式を解いているときだけだった。

悠斗は段々と難しい計算式をスラスラと解いていき、それが中学校レベル、高校レベルと上がっていく度に将来の期待はわが子への畏怖と恐怖

へと変わっていった。

そして悠斗が大学レベルの問題を解き始めたとき、悠斗の父親と母親はある決心をした。

悠斗は今、家から結構な距離にある公園に来ていた。空を見てみれば大粒の雨が持たされた傘に当たって弾かれるのが見える。

父親と母親はここには居ない。別れる時に、悠斗に傘を持たせて何

かを首に掛けさせると公園に連れて行った。

「ここで待っていてください。」

そういわれてからいつたい何時間たっただろうか？傘を差しているとはいえ、長時間雨の降る公園にいたせいか、手が悴んできた。

要するに悠斗は捨てられたのだ。親と別れる時、自分を見る目が、子を見るものではなくもはや人外の化け物を見る目で見ていたからそうだろう。

調子に乗ってどんどん計算式を解いていったのが悪かったのか？と首を捻って考えていると、ふと親が別れ際自分の首に掛けたものに目が言った。

『僕の名前は悠斗です。だれか拾ってください。』

黒い油性マジックでそう書いてある。それで確信した。確実に親に捨てられたと。自業自得といえればそれまでなのだが、余りにも納得がいかない。まあ普通はまだ幼稚園にも行っていない子供が大学レベルの問題をすらすら解けること自体気味が悪いと思うだろうが。

転生してから数年でまた人生終わるのか・・・と一回死んでいるか

らか、案外気楽にそんなことを考えていると目の前に誰か立っているのに気づいた。フツと顔を上げてみるとそこには金髪の美女がそこにいた。

「あーれー？この子如何したのかなー？」

妙にのんびりした口調で話すその女性に悠斗はただ見てることしかできなかった。その女性は首を傾げると悠斗に話しかけた。

「ねえぼく。お父さんとお母さんはどうしたの？」

「・・・・・・・・・・どっかにいつちゃった。」

このままのたれ死ぬのも嫌だし、どうにか理由を付けて言えば保健所辺りには連れて行ってもらえるだろうという悠斗の考えから来た受け答えだった。金髪美女は今更気づいたように悠斗の首に掛けられている札に目を向けた。

「なにになに？えーつとお・・・・。」

よっし！と内心ガッツポーズを作る悠斗。これで可哀想に思った目の前の美女が警察なり保健所なり連れて行ってくれるはずだ。と、札を読み終えた女性が何か考え込んでいるのに気が付いた。何を考

えているのだろうと思っていたがその女性が急に自分の体を持ち上げたせいで考えが中断してしまった。

そしてその女性は悠斗の顔を自分の顔の高さに合わせて、悠斗の目を見ながらあいかわらずのゆったりとした口調で言った。

「よぉーし、じゃあ今日から悠斗君は私の家族にしようか。」

・・・・・・・・はい？

第二条・バーのオカマのママは怖い（前書き）

超展開。まあ気にしないでください。

第二条・バーのオカマのママは怖い

雨の降っている中、傘を差しながら歩いてる女性がいる。その女性
は流れるように綺麗な金髪で、胸の辺りは内側から押し上げている。
顔は10人中10人が美人だと断言するほど整った容姿をしている。

傘を子供のようにくるくる回しながら歩くその女性の名前は『十六
いあきり夜玲』という。

雨が降っているからか、周りに人の気がしないことをいいことに、
まるで子供のように傘をくるくる回したり、水溜りにジャンプして
飛び込んだりしている。

玲は多少濡れても気にしないで歩を進めると、いつも自分の職場
に向かうために通る公園の前に着いた。

チラリと何気なく覗いてみると黄色い傘が小さく佇んでいた。年頃
の子供がはしゃいでいるのだろうと思っていたのだが、どうにも様
子がおかしい。

動かないのだ。遊んでいるのなら傘が動いて子供の姿が見えるは
ずなのに、微動だにしない。

玲は職場で貰った腕時計を確認する。早い時間に出てきたからだろうか、まだ時間はある。目を腕時計から動かない傘に移すと玲はその傘に向かって歩き始めた。

近くまで来て見てみると傘を持っていたのはまだ幼稚園児ぐらいの年の男の子だった。短パンＴシャツで傘を持つ手は長時間冷気に晒されていたからか、赤くなっている。顔は俯いてしまっていて分からない。

「あーれー？この子如何したのかなー？」

自然と疑問の声が玲の口から発せられる。その声に気づいたのか、その子は顔を上げた。その顔は手と同じで冷気に晒されすぎたせいで赤くなっていた。

玲は周りを見渡してその子の親がどこにいるのか探したのだが見つからない。そこで玲は目の前の子に聞いてみた。

「ねえ僕。お父さんとお母さんはどうしたの？」

「・・・・・・・・どっかにいっちゃった。」

驚くほど無感情な声を出してその子はそう答えた。どっかにいったということはいつかは戻ってくるだろうと思つて安心した玲はふと、目の前の子の首に何か掛けられているのを見つけた。

「なにになに？えうつとお・・・。」

屈んでその掛けられているものを見ると紙に防水対策がしてあり、その紙にはこう書いてあった。

『僕の名前は悠斗です。誰か拾ってください。』

それを見た玲は驚いた。まさか今のご時勢こんな小さい子供を猫や犬のように公園に捨てるなんて思わなかったからだ。チラリと捨てられた子供を見てみると無機質な目でその紙を見ていた。漢字が分かるわけがないのに、玲はその子が捨てられたということを本能的に理解しているのだと分かった。

内心悠斗という子供の親に対して腸が煮えくり返りそうだったが、悠斗を怯えさせないためにそれを心のうちだけにしまっておく。そして玲はこの可哀想な子供を引き取ることに決めたのだ。

玲は悠斗の脇に手を入れて自分の顔と悠斗の顔が対峙する位置まで持ってきた。そして笑みを携えてこう言った。

「よぉーし、じゃあ今日から悠斗君は私の家族にしようか。」

その瞬間から、悠斗の親は玲ということになった。

「（どうしてこうなった・・・？）」

そう頭を抱えなくなる悠斗。今現在彼は右手を玲に掴まれ、大きな通りを歩いている。

上を見てみれば玲が上機嫌で鼻歌を歌いながら歩いているのが見える。豊満な胸が歩く振動で上下に揺れるのを見て悠斗は慌てて目を逸らした。

自分は玲が警察などに連れて行ってくれるだけでいいのだが、何故か飛躍して家族になることになってしまった。別に文句は無いのだが、このほわわんとした玲が親だと思うと一抹の不安が拭えない。

でも、ぎゅっと握られている自分の手からは彼女の体温が伝わってくる。それはとても暖かいもので、手だけではなく心なしか体中も暖かくなっていくなような気がした。

「（まあ・・・これでいいのかな・・・。）」

そう、生みの親とは違うが、この人なら大丈夫だと確信していた。きっと自分の能力を見せても彼女なら受け入れてくれる、そんな感じが彼女からする。

そう考えている内に玲は一つの店の前で止まった。その店の名前は『BAR・アリス』。どうやら玲はここで働いているらしい。裏口から店の中に入ると控え室に連れていかれた。

「ちょっとまっててねえ。」

そういわれて別の部屋に取り残されてしまった悠斗。これからどうなるんだろう？と考えていると玲が戻ってきた。そしてその後ろに男の人も来たのだが・・・。

「あらっ！こんなかわいい子を捨てるなんて世も末ね。」

「やっぱりそう思うよねえママ。」

悠斗に近づいて顔を見て渋い顔をする男の人・・・もといオカマ。男には似合わない化粧をして、歩き方も女歩き。見た瞬間一瞬だが悠斗は貞操の危機を感じた。

「なるほど・・・それで拾ってきた玲ちゃんがこの子を家族にしたのかしら？」

「そうなの～！どうにかできないの？ママ。」

悠斗から引いてそんなことを話し始める二人。というかオカマにそんなことを話したって無理じゃね？と思っていたのだが・・・。

「分かったわ、私がどうにかしてあげるから安心なさい！」

「わーい！流石ママ！」

ドンと厚い胸板を叩くママ、ピョンピョンとうれしさを体中で表現する玲。どうにかなるのかよ!？と内心突っ込んだ悠斗が見ている前でバーのママはポケットから電話を取り出すとどこかにかけた。

「・・・あ、もしもし。あたしよあたし。実はちよつとした相談事があつてね。ちっちゃな男の子をウチの女の子が拾ってきてね、家族にしたいって言うからアンタの力を借りたいのよ。」

「は？今仕事忙しい？ふざけた事抜かしてんじゃないわよ！さっさとおやり!」

「そうよ、最初からそうすればいいのよ。ちゃんとできたら私の店に来たときにサービスするからね。」

フオオオオオオ!と携帯電話越しにそう聞こえたかと思えばバーのママは携帯を閉じて満面の笑みを作つて玲に言った。

「これで大丈夫よ。今日から悠斗君と玲ちゃんは家族になったからね。」

「やった〜!」

うれしさのあまり悠斗に抱きつく玲。抱きつかれている悠斗は呆然

とした表情でバーのママを見ていた。このオカマ、どんな経路バイブを持つてやがるんだ？！

悠斗は絶対にこのバーのママを敵にしないと心に固く誓った。

第二条・バーのオカマのママは怖い（後書き）

めだかをハーレムの中に入れるかどうか悩み中。
もし入れたかったり入れなくなったりしたかったら感想にどうぞ。

第三条・出会い

「わぁー！ ゆーちゃん可愛いー！」

「・・・・・・・・・・。」

パチパチと聞こえてくるのは多分悠斗の目の前に居る玲が手を叩いているからだろう。それでは何故、玲が手を叩いているのか・・・それは悠斗の服装にあった。

「今日からゆーちゃんは一年だけだけど幼稚園にいくんだよー！」

今現在の悠斗の服装は、園児服。これは精神年齢がとくに二十歳を超えている身としてはかなりつらい。その印に顔を赤く染めて俯いて羞恥に耐えている悠斗。

その耐えている姿を玲は悠斗が数時間ほどとはいえ、離れてしまうことに悲しみを感じていると思ったのか、思いつき抱きついて悠斗を慰めた。

「大丈夫だよーちゃん。幼稚園にはお友達がいっぱい居るからねえー。」

実の理由がそれではないのだが、それを知らずに慰め続ける玲。悠斗はいつその事開き直すことにしたのか、俯いていた顔を上げた。

顔はまだ少し羞恥に染まっているが、覚悟を決めたようだ。玲はその行動を違う意味で捉えたようだが、力強く首を縦に振ると悠斗を幼稚園に送るために悠斗の手を引いて車に向かって歩き出した。

「はいみんなー！今日から皆のお友達になる、十六夜悠斗君だよー！みんな仲良くしてねー！」

はい！と元気な声がある幼稚園で上がった。その幼稚園の年長組のいる部屋で今、悠斗の紹介が行われていた。

当の悠斗はできるだけ怪しまれないように年相応に振舞うことにした……のだが、これがまた羞恥プレイ。

ぶつちやけ二十歳過ぎた大人が年長組とはいえ、幼稚園児と一緒にわいわい騒ぐのは恥ずかしすぎる。いつそのこと自分だけ斜に構えてやろうかと悠斗は考えたのだが、それはそれで怪しまれる。

それに悠斗の異変を察知した先生が連絡手帳にそれを書き、母親である玲に報告する可能性がある。それだけは避けたい。

今はただの幼稚園児である悠斗。玲に斜に構えて友達を作らないことを聞かれて不安にさせることはしたくないのだ。

拾ってくれた恩もあるし、育ててくれる恩もある。それに下手に無下に扱えばバーのママに何かされそうな気もするからだ。

「（幼稚園児つてのも、結構大変なモノなんだなあ・・・）」

心の中でそう呟いている悠斗は今現在、同じ組の奴らと鬼ごっこをして遊んでいる最中である。しかし・・・。

「暇だ・・・。」

そう、暇なのだ。一応鬼ごっこなので悠斗も狙われてはいるのだが、如何せんまだ幼稚園児なのだ。その動きは直線的で、悠斗に触ろう

としても身を捻ってそれを避けてられてしまう。

動きも緩慢、スタミナもまだ付いていない園児の動きはそれはそれは悠斗にとって見ていて退屈以外に感じるモノがない。

・・・そういうと悠斗もスタミナも付いていないし、動きも緩慢。なのだが、悠斗は能力の一部を使って少しスタミナを付けているのだ。

この世界が何処であろうとも、悠斗はこの能力に頼っていつかは潰される事を危惧していた。

もしかしたらこの能力を打ち破る者が来るかもしれない。そうしたら悠斗はただの普通にんげんに成り果ててしまう。

それだけは避けたい悠斗はベクトル操作を使い、自分の呼吸時に入ってくる酸素の濃度を下げていた。

今の悠斗の状態を一言で言えば、酸素不足。呼吸は乱れ、足は赤血球が酸素をうまく運べていないのか、鉛のように重い。しかし、これは現代のトップアスリート達もやっているトレーニング・・・所謂高地トレーニングというものののだ。

人は一部の地域などを除いて、余り高い標高の所には住んでいない。そのため、呼吸器や循環器などの器官もその低い所で鍛えようとしても、その場所の酸素濃度に慣れているから効果は薄い。

しかし、高地などの所は高いところにあるために酸素濃度が薄い。普通に呼吸しては苦しいから、より多くの酸素を効率よく取り入れられるよう、呼吸機能がアップする。また、より多くの血液を全身に送り出せるよう、循環機能がアップするのだ。

低酸素状態で運動をする場合、平地において運動をするのに比べて同じトレーニングメニューでも、より多くの心肺負荷をかけることになる。したがって、筋肉や関節などに無理な負担を強いることなく、心肺機能を鍛錬することが可能なのだ。

たとえば、平地で3キロのランニングをするよりも、高地で1キロのランニングをした方が、膝や足首などに負担をかけず、効果的に心肺機能を鍛えることが可能だということ。そうすれば、トレーニングにかかる時間も短縮できるメリットがある。

それに悠斗は幼稚園児の状態で、筋肉は余り付けたくない。幼いころに筋肉を付けると身長が伸びないということがその考えの大半を占めている。残りは幼稚園児で筋肉ムキムキになったら気持ち悪いというのがあったりするのだが。

そんなことを考えて悠斗はどうか生活の中でも高地トレーニングをできないか考えたところ、ベクトル操作を使って呼吸時に取り入れる酸素を減らせばいいと考えたのだ。

高地トレーニングの効果は保って2週間程度。しかしそれは大人になって高地トレーニングをした場合であって、小さいころからそれをやっていれば普通の人間より高い心肺能力を付けることができる。

現に標高の高いところに住んでいる人達は、スポーツ選手でなくとも、日常の動作によって鍛えられているので、平地に住んでいる人に比べ、高い心肺能力を持ってるのだ。

悠斗は低酸素状態をキープしながら確実に心肺能力とスタミナを付けていく。とここで休み時間が終わったらしく、それぞれが教室に戻っていく。

荒い息を自分の教室に向かって歩きながら整える悠斗。今、酸素を元に戻したらどうなるのか少し楽しみなのだが、それを今するつもりはない。

某龍球の主人公とハゲも修行が終わるまで甲羅を降ろさなかつたのだ。自分もそれに見習おうと思った悠斗は中学生か、高校生の時に戻そうと思っているのだ。

息を整えた悠斗が教室に戻り、席に着くと先生が何か黒板にひらがなで何かを書いている。それを見るとそこには『ようちえんのみんなといっしょにあそぼう!』と書かれていた。

「はいみんなー、今から幼稚園のみんなと一緒に遊ぶことになりましたー！みんなのほうがお兄ちゃんお姉ちゃんだから優しくしてね！」

またもや、はい！と元気良く返事をする園児達。悠斗は一応だがそれに乗っていた。

先生は入り口近くに園児達を集めて並べると外に出た。外に出てみるとそこには年長組の他に幼稚園に通っている子供達が並んでいた。

悠斗たちをその列の隣に並べると今度はグループを作るらしく、どんどん園児達を分けていった。

悠斗のグループは年長組の悠斗一人、悠斗の一つ下の年の子が3人、そのまたさらに一つ下の年が5人と計9人の構成になった。

と、そこで悠斗は何かおぼろげだが、どこかで見た顔が二人、悠斗の一つ下の年の顔ぶれの中にいた。

紫色が掛かった黒髪をおかっぱにして、一本アホ毛が飛び出ている少女だ。その顔は今見た限りでも成長すればかなりの美人になるとがわかるほどに整っていた。

もう一人は平凡な男の子。顔はそれなりに整っており、人懐っこい笑みを浮かべている。髪は黄色っぽい茶髪。

どこかでみたんだよなあ・・・と思っている内に先生のほうから自己紹介をしろといわれたため、まずは一番年が上の悠斗から自己紹介を始めることにした。

「えーっと、ばらぐみのいざよいゆうとだよ、よろしくね。」

よろしくねー！と班から返された。できるだけ幼稚園児対象の自己紹介の仕方にしたのだが、うまくいったようで悠斗は安心した。

次々と幼稚な言葉遣いで自己紹介をする園児達。そして悠斗がどこかで見た顔の園児が自己紹介を始めた。

「椿組の黒神めだかだ、よろしくたのむぞ。」

「僕もつばきぐみの人吉善吉だよ！よろしくね！」

その名前を聞いた瞬間に、悠斗は何処で見た顔を思い出し、ここがどんな世界かを知った。

「（黒神めだかに人吉善吉！？っっーことはここはめだかボックスの世界か？！原作を見るから分かったけど・・・確かに見てみりや面影はあるな・・・。）」

意外にもこのとき悠斗は冷静だった。他の奴らと同じく挨拶を済ませると思考を開始した。

「（どうする？まさか黒神と善吉達の二個上だとは思わなかったが・・・このまま介入するにしたってなあ・・・年齢的に微妙だし、何せ幼稚園が一緒なだけだ。まさか小学校も中学校も同じとは限らない。今だけ仲良くしてやるか・・・。）」

そう思考を打ち切り、一緒に遊ぶために班のみんなと一緒に遊びを考えることにした。

「じゃあみんなで鬼ごっこをしようか。」

考えがまとまり、結果的には休み時間にやっていた鬼ごっこをする事に決めた。常時低酸素状態のため、いいトレーニングにもなる。他のみんなも納得してくれたため、じゃんけんで鬼を決めることにした。

「じゃあいくよー。最初はグー、じゃんけんポンッ！」

悠斗がグーを出し、めだかがチョキ。善吉がグーを出して他は全員グーかチョキだった。負けた者同士でじゃんけんをした結果、めだかが鬼になった。

「では10秒数えたら追いかけるからな。いーち、にいーい……」

その間にみんな逃げ回る。悠斗も遠くに逃げてめだかのカウントを待つ。どうやら10秒カウントし終わったようで、班のみんなを探してタッチしようとする。と、めだかの目が悠斗の方を向いた。

ニイ、と笑みを浮かべるとこちらを鬼にすべく、ダッシュでこちら

に向かってきた。しかし所詮は3歳児、二つ上の悠斗とは身体能力に差があるはずなのだが……。

「(っってこいつ速すぎるだろ!)」

そう、自分の同じクラスの奴らと比べても足の速さはめだかの方が速かった。見る見るうちに悠斗との距離を詰めるめだかを見て悠斗は、

「(異常は天賦アブノーマルのモノだが……それをその歳で使いこなすか!)」

とにかく自分はさらさら鬼になるつもりはまったくない悠斗はもう3メートルもないめだかとの距離を自分から詰めた。

そのことに少し驚いた様子のめだかはしかし、タッチするための手の力を緩めずに目前まで来ている悠斗に向けてその手を触れさせようと伸ばし――

「なっ!?!」

悠斗が目の前から忽然と姿を消し、伸ばした手は空振りに終わった。めだかは何処に行ったか探ろうと有辺りを見渡すと、悠斗はめだかからみて左方向へ逃げたようでそこに悠斗の背中があった。

何故消えたのか、地面を見てみると悠斗が踏み込んだであろう地面の一部が少し抉り取られていた。5歳児でこんなことは出来る筈がない。もしできたとしても急な方向転換で足首を痛めてしまう。

それを悠斗はなんのリスクも無しにやってのけたのだ。自分でもこううまくいくかどうか分からないめだかは、もしかしたら自分と同じ存在が現れたのかもしれないと思った。

善吉が居るとはいえ、善吉は普通^{ノーマル}。それに加えてまだ3歳の善吉と自分が対等に遊ぶのは難しい。どうしてもめだかの身体能力の方が善吉の身体能力の上をいつてしまう。

他の園児達を集めて遊んでも結果は同じ。善吉はめだかのことを褒めた。それで心は満足したのだが、体が満足しなかった。いつも欲求不満で、すぐにゲームに勝ってしまう。

たのしいけどたのしくない。それが悠斗と遊ぶ前のめだかの遊びへの認識だった。

しかし、悠斗は違かった。自分の攻撃をいとも簡単に、そして複雑な動きで避けて見せた。普通だったら既にあれでタッチできていたろう、しかしできなかった。そう普通だったら。

彼を一言で表すならば、普通でも特別でも異常でもない。

アウトロー
規格外

後に箱庭学園で断罪者として名を馳せる少年。

それが今、めだかの目の前に居る。

めだかに未来を予知する能力はない。しかし、彼女の脳が言っていた。『こいつには敵わない』と。

しかし、彼女はその言葉にさらに笑みを深くした。敵わなくてもいい、勝てなくともいい。やっと・・・やっと自分を負かす事のできる奴が現れた！

そのことに歓喜しためだかは逃げる悠斗の背中を全速力で追いかけた。

「はい！みんなーおわりのじかんだよー！」

先生の声が外に響き、鬼ごっこは終了した。

悠斗は疲労困憊といった状態で、地面に寝転んだ。めだかは荒い息を吐いて膝に手を突いて休んでいる。低酸素というハンデがあるのにもかかわらず逃げ切った悠斗は規格外だろう。

あの後悠斗はずっとめだかにロックオンされて、執拗に悠斗を狙った。鬼になりたくない一身で逃げ切った悠斗は自分に影が差すの

を感じて目を開ければそこには自分の顔を覗き込むめだかがいた。

「・・・・・・・・・・。」

「・・・・・・・・・・。」

じい、とまるで穴が開くんじやなかったぐらいにめだかは悠斗のことを見続けている。沈黙に耐え切れなかったのか、悠斗が口を開いた。

「・・・・・・・・何かようか？」

「・・・・・・・・・・。」

その質問に対してもじっと見続けるめだか。とりあえず悠斗は身を起こすためだかが口を開いた。

「・・・・・・・・貴様は、何なのだ？」

「・・・・・・・・極々普通の人間だけど？」

「普通の人間が私に勝てるはずがない。」

「じゃあ自分は普通じゃないと？」

「ああ、それは自覚している。それよりも貴様の話だ。何故私に勝つことができた？」

「……さあ？矮小な人間である自分には分かりかねる問題だね。偶々かもしれないし、もしかしたら今度やったら負けるかも」

「……いや、私は貴様に勝つことはできない。」

そう呟いためだかの声は悠斗には届かなかったようで、悠斗は疲れた体に鞭を打って立った。それに呼応するようにめだかも立って悠斗の前に立つ。

めだかの身長は悠斗より少し小さいぐらいなので必然的にめだかが悠斗の顔をしたから見上げるような形になる。

そしてめだかはいつもやっている通り、家族に接するような感じの愛情表現でキスをしようとして、

「むっ？」

目の前には誰も居なかった。悠斗は何処にいったのか捜すと、悠斗は自分の教室に入るところだった。一瞬であそこまでたどり着いたことに素直に感心するめだけに、悠斗は背中越しに手をひらひら振った。

「アブね。アイツが幼稚園のときに誰彼かまわずキスする事、忘れてたな。」

俺のファーストキスは渡さねえ！と深く心の奥に刻み付けると悠斗は自分の教室に入っていた。

次の日から悠斗はめだかと善吉に懷かれてしまい、めだかに何かとキスを迫られていつも逃げることになるのは余談である。

第三条・出会い（後書き）

多くの意見ありがとうございました。
意見を元にして考えた結果、めだかハーレム入り、善吉TSといった風に進めていきます。

第四条・めだか家（前書き）

今回はシリアス？なのかな・・・。

第四条・めだか家

豪邸、というものを悠斗は見たことが無い。前世では極々平凡な家庭で生まれ育ったため、そんな豪邸というべき建物はTVの中で見ることが無い。

別に豪邸を見て羨んだりとか、妬んだりとかはしない悠斗はすごいなーぐらいにしか感想が出てこないのだ。

悠斗としてはあんな広い屋敷を持っていて、内装も豪華であることに何の意味があるのかと思っている。ぶっちゃけあんな豪華にしないでいいんじゃない？と思ったりもしている。

さて、冒頭から何故こんな話をしているのかというと……。

「さあ、これが私の家だ。如何思う？」

「すごい……大きいです……。」

現在悠斗が居るのは黒神めだかの家の前。悠斗に自分の家の感想を尋ねるとそんな呆然としたような声で感想を言った。

いや、その感想はふざけていったものでもなんでもなく、本当に大きいのだ。

まず目に付くのは巨大な門。堅牢な鉄で出来た門は並大抵の事では壊れなさそうだ。その大きさは2階建ての家ぐらいの大きさだろう。

門の隙間から見える庭・・・という名の野原は聞いた話によると、家まで車で30分ほど掛かるそうだ。そんな広さなのに木々や草花は手入れが行き届いており、とても綺麗だ。

「さて、車で行ってもいいんだが・・・今日はヘリで行こうか。」

「わーい！ヘリだー！」

「・・・勝手にしてくれ・・・。」

めだかがヘリで家まで行こうと提案すると一緒に来ていた善吉がヘリと言う単語を聞いて飛び跳ねる。どうしてこうなったのかと悠斗は今朝のことを思い返していた・・・。

「え、電話？」

「うん、めだかちゃんって言う子からきたよ。」

幼稚園が休みの日、悠斗は朝食を食べ終わると電話を取った玲にそう尋ねていた。どうやら電話の相手はめだからしい。自分に用があるらしいので電話を玲から渡してもらってしゃべり始める。

「もしもし。」

『む、悠斗か。朝早くからすまないな。』

「いや、基本的に俺は早起きだから大丈夫だけど・・・、何か用？」

『ああ、今日暇だったら一緒に遊ばないか？』

どうやら遊びの誘いの電話らしい。チラリと玲のほうを伺うと笑顔

でコクリと頷くのが見えた。どうやらOKらしい。

「ああ、いいよ。何処で遊ぶ？」

『私の家で遊ぼう。ああ、善吉も誘ってもいいか？』

「構わないよ。人数が多ければ楽しいしな。」

『ああ分かった。では準備が出来たらそちらに迎えに行く。』

「ん、分かった。じゃあな。」

そういつて電話を切る。口調が幼稚園児とは思えないほど達者なのは、めだかに引っ張られているからだろうか。ちなみに玲はこの口調については、

『かつこいい〜！』

だそうである。どこまでもマイペースな母親だと苦笑している悠斗だった。

「母さん。今日はめだかちゃんと善吉と一緒に遊ぶことになったからね。」

「分かったあゝ。母さん今日は早番だからねゝ夕飯までには帰ってきてねえゝ。」

分かった。と返して家から出るとそこには既に黒いリムジンが止まっていた。窓が開いて善吉とめだかが顔を出した。運転席から降りた執事らしき初老の男性にドアを開けてもらい中に入る。

「おはよう。」

「おはよー!」

「おはよう、では行こうか。」

めだかのその一言で車は驚くほど静かに、そして緩やかに発進した。

「日本でこの大きさは異常だろ……。」

バタバタバタなんて轟音は何故か鳴らない不思議なヘリに乗って悠斗達は黒神家の庭を空から眺めている。めだかは見飽きているのか遠くのほうを見ているし、善吉はさすが子供というべきか、嬉しそうに下を眺めている。

ヘリで10分ぐらい経っただろうか、やっと黒神家らしき建物が見えてきた。遠くからでも分かる。あの建物はデカイと。

いくら日本有数の金持ちだからといって、これはでか過ぎるんじゃないか？ 呆れていると、ヘリが着地体制に入った。

これまた静かに着地するとドアが開けられた。外に出て見ると紅いカーペットが玄関まで通じており、その脇にはメイドや執事が並んでいる。めだかの後に続いてカーペットを恐る恐る歩くとメイドと執事達が腰を折って、

「お帰りのさいませ、お嬢様。」

と一糸乱れぬ動きと声で出迎えた。その光景にもめだかは手を軽く振って答えた。

「（まさに王者つてところだな・・・。）」

心の中でそう呟いてめだかの後に続く悠斗と善吉。馬鹿でかい豪邸に入ると中はさらに眩しいほどに装飾がなされていた。繁々と眺めながらいくつかの部屋を通って入った部屋は、

「さて、じゃあ私の部屋で遊ぼうか。」

そこはめだかの部屋らしく、他の部屋までとはいかないが明らかに幼稚園児が宛がわれる部屋ではないほど豪華だった。

どこからかオセロや人生ゲームなどのボードゲームを引っ張り出しているめだか。善吉はボードゲームの前に座って悠斗のほうをニコニコ笑いながら見ている。

じゃあ遊びましょうかね。と思ってボードゲームを始めようとしたその瞬間。

「めだかちゃああああああああん！」

と大声を出しながら部屋に突貫してきた謎の男の子。その男の子は一直線にめだかに突撃して、

「ふん！」

見事なめだかのジャブによって沈められた。そして何事も無かったかのように部屋の外に放り投げてゲームを引っ張り出す作業に戻るめだか。状況についていけない悠斗は目の前で座っている善吉に聞いた。

「……今の子誰？」

「ん〜？今のはめだかちゃんのお兄ちゃんのまぐろさんだよ！」

ああ……あのシスコンか。と知った悠斗はチラッと部屋の外を見てから善吉とオセロを始めた。真黒についてはスルーするつもりらしい。

ゲームを全て引っぱり出したらしいめだかをゲームに加えて遊んでいると、悠斗はトイレに行きたくなった。

めだかに一言断ってトイレの位置を聞くと部屋を出てトイレに向かった悠斗。

用を足して部屋に戻ろうとした悠斗なのだが・・・。

「ココ何処だよ・・・。」

余りにも家が広すぎるために悠斗は迷ってしまった。メイドや執事に聞こうにも誰一人いない。

仕方が無いのであやふやな記憶を頼りに進んでいく。そしてここかな？と思つた扉を開いてみると・・・。

「うわぁ・・・。」

そこはまるで図書館のようだった。高く聳え立つ本棚にはぎっしりと本が詰まっており、それが何列にも並んでいる。

その光景に目を奪われながら奥に進んでいくと、誰かの気配がする。

カリカリカリカリカリカリカリカリカリカリカリ
カリカリカリカリカリカリカリカリカリカリカリ
カリカリカリカリカリカリカリカリカリカリカリ
カリカリカリカリカリカリカリカリカリカリカリ
カリカリカリカリカリカリカリカリカリカリカリ

奥に進むにつれそんな音も聞こえてくる。いったい誰が何をしているのか、見てみると……。

「ぐっ……はあ……！」

そこにいたのは一人の少女だった。しかし、その少女は異常だった。

四肢は鎖で繋がれており、逃げ出せなくなっている。周りには膨大な量の紙や本が積み重なっている。部屋の電気も付けずに机の電気だけで勉強しているようだ。ペンは決して留まることなく動き続けており、折れた鉛筆やシャープペンシルがそこら中にころがって

た。

苦渋に満ちた顔で勉強に励んでいる少女の名は、黒神くじら。黒神グループの第二子だ。

するとくじらは悠斗の存在に気づいたようで、釣りあがった目でこちらを睨んだ。

「…………手前えは誰だ…………？」

「十六夜悠斗、めだかの友達だな。」

「…………妹のか、フン。」

鼻で笑うとくじらは興味が無いといわんばかりにまた勉強に戻った。その様子に疑問を抱いた悠斗は一言質問してみた。

「なあ、なんでお前はそんなに勉強する訳？」

「…………は？決まってるだろ。素晴らしいものを生むためだ。素晴らしいものは地獄からしか生まれない。歴史上の天才は大体不遇な人生を送ってた。偉大な発明も発見も大抵劣等感から生まれてん

だよ。だからオレも絶対に幸福になっちゃいけないーんだよ。」

「幸福になってはいけない、ね。……甘ったれるな。」

そう呟いた悠斗は勉強しているくじらを無理やり立たせて壁に叩き付けた。胸倉を掴んで壁に押し付けたまま上に持ち上げる。

「幸福になっちゃいけないだろ？ふざけんな、この世界にどれだけ
の人が不幸になってると思ってるんだ。不遇な人生を送る奴は天才？
劣等感を抱いてりゃ偉大な発見が出来る？そんな理論が立てられて
りゃこの世の中の技術はもう300、400年先に行ってるはずだ。
天才も、偉大な発見も幸福も不幸も関係ねえよ。要は身近なもの
に疑問を持つことから始まるんだよ。不遇な人生を送ってきたのは
その時代のせいだろ。勝手に不幸になりゃ天才に成れるとか発見が
出来るとかほざいてんじゃねえよ。」

そういうと悠斗はくじらを掴んでいた手を離れた。ずるずると壁に
凭れ掛かりつてその場に座ったくじら。悠斗は積み上げられた紙を
適当に掴んで読む。

「……コレを見る限り人体についてのスペシャリスト。理科
科学の分野に関して言えばめだかを上回っているか……。」

ポツリと呟いて紙を元あった場所に戻す。と、悠斗は何かに気づい

たのか本棚にある本を掴んでパラパラめくり始める。それを読み終わるとくじらが使っていた机の席に座り問題を解き始めた。

「……なんでお前はオレなんかに構うんだよ。」

「さあな、気まぐれだ。」

適当に返しながら問題をスラスラ解いていく悠斗をぼんやり見ながらくじらはまた問うた。

「……天才ってなんだ？」

ピタリとペンを動かす手を止めて悠斗は顔を上げてくじらのほうを向く。うーんと少し唸ってから手を動かし始めて答えた。

「天才、か。生まれながらに持っている奴か、平凡な奴が地獄のようなことをして得られる称号だな。まあ自分でいうのもなんだが俺は生まれながらの天才だな。もちろんお前もだが。」

「……オレも……？」

「ああ、見た限りお前は天才だよ。理科学の分野においては超一

流だ。俺が保障してやる。」

「お前に保障されたって……。」

「そうか？まあそれが嫌ならそれでいいんだけどな。」

そついうと問題が解けたのか、束になった紙を整えて机の隅に置く。本を元に戻してくじらの目の前に立った。

「勉強をやめろとは言わない。けどな、不幸に成りたいとか幸福になつちやいけないとかは言うな。お前の禁欲ストイックさはもつと他の事に有効活用するべきだと思っぜ。……まあまずは部屋の片づけから始めることをお勧めするよ。」

荒れ果てた部屋の様子を見渡しながら苦笑気味に言う。悠斗は出口に向かって歩き出した。と、ふと足を止めて振り返らずに、

「ああ、机においてある紙束はお前の勝手にしてくれ。どうせ暇つぶしに解いたものだからな。」

それだけ言うと悠斗は部屋から出て行った。くじらはゆっくりとした動作で立ち上がると悠斗の言っていた紙束を見てみると、それは何かの証明らしい。パラパラ見て、最後の文章を見て、くじらは呼

吸が止まるかと思うほどの衝撃を受けた。

『これらのことから、3 以上の自然数 n について、 $x^n + y^n = z^n$ となる 0 でない自然数 (x, y, z) の組み合わせはない』

悠斗が解いていた問題は、数学界最大の難問といわれているフェルマーの最終定理だった。360年間誰にも解くことのできなかつた問題を、悠斗は暇つぶしと称して簡単に解いてしまっていたのだ。

その証明が書かれた紙を提出すればたちまち彼女は有名人になるだろう。しかし、彼女はそれをぐしゃぐしゃにするとゴミ箱に捨ててしまった。くじらは自分の力で栄光を掴み取ると決心したのだ。

「……フン。どうやら天才っていうのも間違いじゃねーみたいだな。……気づかせてくれたことには感謝してやるか……。」

くじらはとりあえず悠斗に言われたとおり、部屋の掃除でもするか。と意気込んだ。

「だからココ何処だよ……。」

部屋を出てからまた迷っている悠斗には、くじらの心境の変化など知る由もないが。

第五条・兄の愛（前書き）

更新が遅れて申し訳ありませんでした！見苦しいですが言い訳を・・。

21日の更新後、すぐさまテスト期間に入ってしまった、11月中はテスト勉強の為にPCに触れられず、12月4日にテスト終了したので気を緩めた次週、まさかのインフルエンザに掛かってしまい、執筆できませんでした。今は熱が37度まで下がったので隙をみて執筆、投稿しました。インフルに掛かるとはいえ、これは自分の体調管理がなって居なかったせいです。本当に申し訳ありませんでした！そして熱が出ている状態で執筆したので・・・本文が・・・ウボアーな状態になっているのでご了承ください！

第五条・兄の愛

子供の頃なんてものは直に過ぎ去ってしまうものだ。それは転生した優斗も例外ではない。

いつの間にか悠斗は幼稚園を卒業し、小学校に上がっていた。といっても今は入学したての一年生ではあるが。

入学してから数日、既に顔と名前を覚えたクラスメイトたちと、ニコニコ笑みを浮かべている教師が朝のHRをしている中、悠斗はというと・・・、

「・・・・・・・・zzz・・・・・・・・zzz・・・・。」

寝ていた。それは穏やかな顔で、そしてまるで死人のように静かに眠っていた。

が、その眠りを妨げる人物が一人。隣の席から手を伸ばして悠斗の体を揺する。

その揺すりで目が覚めたのか、眠たげに体を起こして目を擦って起こした本人を恨めしげな目で見る。

「……真黒、何故起こしたし……。」

「そりゃあ悠斗を起こさないと僕まで先生に怒られちゃうからだよ。」

「やれやれ、といった目で悠斗をみるのは黒神真黒。苗字から分かる通り、めだかとくじらの家族である。」

2本飛び出たアホ毛にめだかとくじらと同じ紫がかつた黒い髪の毛は肩で切りそろえられている。顔つきも整っているので将来モテる男になる……と思うのだが、如何せんこの少年には残念な要素が入っている。それは……。

「それよりもさあ！今日の朝めだかちゃんとかくじらちゃんがさ！可愛らしい仕草で朝ごはんを食べてたんだよ！」

興奮したように捲くし立てる真黒は、いわゆる妹萌えシスコンという部類に入る。しかも重度の。

そのシスコン具合といったら半端ではなく、授業と授業の間の休み時間、ずっと自分の妹であるめだかとくじらの事について悠斗に話し続けるのだ。しかも毎時間。

げんなりとした悠斗は机に突っ伏して、まるで呪詛のように隣から聞こえてくる妹自慢の演説から逃れるために耳を手で塞ぐ。

自分の演説をシャットアウトされているにもかかわらず、いまだに自慢を続ける真黒とは、以前めだかの家に行ったときに知り合った。

家でもそのシスコン具合は留まる事を知らず、肉体的なスキンシップを測ろうとくじらやめだかに近寄っては撃退され、近寄っては撃退されの繰り返しである。

そのことについて真黒は、

『二人はきつとツンデレなんだ！』

と、自信満々にいって二人のドロップキックを食らっていた。

会う度に自慢を聞かされている悠斗としてはたまったものではないので最近耳栓を常備している。

ポケットに入っている耳栓をとってつけるために手を耳から離すと、珍しく演説は途中で止まったらしく、悠斗の耳には入ってこない。

珍しいな、と思った悠斗は真黒の方を見ると真黒は真剣な目つきで悠斗を見ていた。

「悠斗には本当にお礼を言っても言い尽くせないくらい感謝してるんだ。」

「……はあ？」

いきなりそんなことを言われて首を傾げる悠斗。真黒は窓の方を見ながら言葉を続ける。

「……くじらちゃんのことだよ。くじらちゃんは本当に変わった。」

その説明に、ああ、と声を漏らす悠斗。

「ほんの1年前ぐらいまで部屋から滅多にでなかったくじらちゃんは今じゃ一日一回は外に出てる。自分を壊すような勉強は控えて、めだかちゃんと一緒に遊ぶようになった。」

器用にペンを指で弄びながら悠斗は真黒の話を聞く。真黒は視線を悠斗に戻すとまた話を再開する。

「だから、ありがとう。僕の大切な妹を救ってくれて。」

「……よしてくれ。俺は唯自分の思いをあいっぴつにつけたただけだ。救ったなんて大層なことをしてないよ。」

「それでも！……僕の妹を救ったことに変わりはない。ありがとう。」

真剣な顔でそんなことを言われると、悠斗も恥ずかしいものがあるわけで。ちよつと耳の端を赤くしながらペン回しに集中する。と、集中している悠斗の耳に真黒のこんな呟きが入ってきた。

「……まあくじらちゃんめだかちゃんはやらないけどね……
・！」

恐ろしい、底の無いような低く冷たい呟きが真黒の口から漏れていた。ビクツと回していたペンを落としてしまい、真黒のほうを見てみると、顔が影に隠れて見えない。が、目だけは爛々と嫉妬で輝いていた。

コーホーコーホーと口から何かの瘴気でも出していそうな音で息をしている真黒を見て、久しぶりに悠斗の体を悪寒が走った。ちなみ

に玲のバーのオカマのママに会ったとき以来である。

何故真黒がこうに変な風になっているのかというと、悠斗がめだかの家に行くときに起こることが原因になっていた。

それは悠斗がめだかの家に行くと、必ずめだかとくじらが悠斗に引つ付くということが原因だ。離れさせようとしても、めだかは無垢な目で、くじらは不貞腐れたような目をして良心が痛んで引き剥がせない。

どこでフラグ建てたのかなあ・・・？と遠い目をしながら二人のなすがままにされていると、急に殺気が悠斗を突き刺す。

電流を流されたかのように跳ねた悠斗はどこから来ているのか探ると扉のほうを見てみると・・・。

「・・・・・・・・ギリツ・・・・・・・・・・！」

扉の隙間から般若の形相をした真黒が覗いていた。それはもう、視線で人を殺せるくらいの形相で悠斗を睨んでいた。齒軋りがここまでする。聞こえてくる。

冷や汗ダラダラと流している悠斗を不思議に思ったのか、悠斗の視線を追う二人。そして真黒に気づいたのか、トテトテと扉の方に近づく。

二人が近づくにつれ、真黒の顔が笑みの形に戻る。そして二人が扉の前に来ると、それはもう満面の笑みで二人を見る真黒。二人はそんな真黒を見て、

パタン、ガチャリ。

扉を閉めて、鍵を掛けた。

めだかとかじらは鍵が閉まっていることを確認すると、悠斗の方に戻って遊びを再開する。

「え・・・・・・・・いや・・・・・・・・あの・・・・。」

と、真黒が開いたのに気がついたのか、瘴気を出すのをやめて悠斗の方を見る。

悠斗はクイツと部屋の中を親指で指して、

「遊ぶか？」

そう言った。真黒は満面、とまではいかないが、笑みを悠斗に見せてコクリと頷いた。

部屋の中に入った真黒は、一直線に自分の妹たちの所に突っ込んでいき、

ドゴツ、プスツ、ボタン。

見事に二人に迎撃されて、床に沈んだ。しかしそれはとても満足気な笑いだったが。

入れた意味ねーじゃんと思ったのはここだけの秘密である。

とまあそんな事があって、悠斗と真黒はコンタクトを取り始めて、
今に至る。

悠斗としても友人は大歓迎だ。この調子でどんどん友達や知り合
いを作っていきたいと思う悠斗であった。

「でねえ！めだかちゃんとかじらちゃんが！」

「……ウボア……。」

できればこのシスコンよりマシな奴とだが。

第六条・衝撃（いろんな意味で）（前書き）

細かいところは気にしないで、どうか寛大な心で見てくださいね！

第六条・衝撃（いろんな意味で）

日曜日・・・それは子供や大人でさえ休むことの出来る最高の曜日。
このときばかりは誰もが自由な時間を過ごす。

普段忙しいサラリーマンは、寂しい思いをさせている息子と一緒に
遊んで絆を深めるだろう。

久しぶりに父親と遊ぶことの出来る息子はここぞとばかりにはしゃ
いで、動き回って、父親に甘えるだろう。

家族サービスでどこか遠くに遊びに出かけて楽しんだりもするだろ
う。

そう、そんな最高の曜日なのだが・・・。

ピンポン、と悠斗の家のインターフォンが鳴る。チラリと母親を盗み見ると、未だ布団の中で夢の世界から旅立ったまま戻って来ていない。インターフォンの音にも反応しない所から見ると、そうとう深い眠りにについているのだろう。

悠斗はバラエティ番組が映っているTVの電源を消すと、足早に玄関に向かった。

「はい、どちら様ですかー……。」

そっぴいながら手をドアのノブにかけてドアを開けて尋ねてきた人物を見る、と。

ボタン！

その人物の姿を見た瞬間思いつきりドアを閉めた。目を擦って頬をぺちぺち叩く。まだ寝ぼけてたのか？と首を捻りながらドアを再度開けて、

ボタンッ！

また閉めた。悠斗は、きつと疲れているんだハハハ、と呟いて玄関

から離れようとしたが、急に手を誰かに掴まれて前に進めなくなっ
てしまった。恐る恐るその掴んだ手から視線をずらすと、

「・・・・・・・・おい。」

ドアの隙間からめだかが手を伸ばして悠斗の手を掴んでいるのが見
えた。その表情はいつもの無表情ではなく、どこか怒りの気配を感
じさせる。グイと引っ張ってみるも、その手は外れない。

「何故いきなり閉める？」

「いやあ、まさか一日休みの日曜日に遊ぶなんて考えてそうめだ
かちゃんが来るとは思わなかったからだよ？本当だよ？」

「私だけではない、善吉もいるぞ。」

oh、と空いているもう片方の手で天井を仰いだ額を抑える。
善吉が来たのならまず遊ぶことを断ることは不可能になった。

以前このような日曜日に同じようにめだかと善吉が悠斗を遊びに誘
おうと家に来たことがあった。そのとき悠斗は面倒くさいからと断
ったのだが…………。

『ゆう君は僕と遊びたくないの・・・？』

と泣き出しそうな顔でそういわれてしまった。するとどこから嗅ぎ付けたのか、オカマのバーのママがすっ飛んできて、

『何泣かせてるの！』

という言葉と共に悠斗の頭上に鉄拳が落とされた。・・・そのとき悠斗はギリギリベクトルを操作していたのだが、何故かそのまま喰らってしまったのは不思議な思い出である。

そのあとバーのママが何か言っていたような気がするが、生憎と悠斗は拳骨の痛みで悶絶しており、そんなことを聞いている暇は無かった。

といったような経緯があるからして、悠斗は善吉が誘ってきたら断れなくなってしまうのだ。めだかもそのことを即座に学習して、悠斗を遊びに誘うときは必ず善吉を連れて行っている。

グイグイと現在進行形で家から悠斗を引っ張り出そうとしているめだか。その後ろには確かに善吉も見える。だが、母親である玲に黙って出かけていく訳にもいかない悠斗は何とか事情を説明して手を離してもらった。

掴まれた手首の柔軟運動をしながら玲が寝ているベッドに近づく。母さん、と声をかけるも返事はない。今度は揺すりながら声をかける、が少し呻いただけで起きない。悠斗は仕方が無い、と頭を掻きながら玲の耳元に顔を近づけて、

「あーあ、起きてくれたら『ちゅう』、してあげたのに・・・。」

「ハイ起きたー！今起きたー！」

さっきまでの眠りの深さは何処にいったのやら、ガバツと神速の勢いで布団を弾き飛ばして起きる玲。そして獣の目をしながら悠斗に這いずりよる。

「えへへえーゆーちゃん？私ぼんやりと『起きてくれたらちゅう』してあげる』って聞いたんだけどおーえへへえー。」

玲、暴走モード。この状態になっってしまうといくら悠斗でも止める術は限られてくる。出来ればこの起こし方はしたくなかった悠斗だったが、あの拳骨の痛みとこれからすることを天秤にかければ安いものだ判断したのだ。

涎をだらしなく垂れ流しながら悠斗に近づく玲。悠斗はううーと覚

悟を決めて、

「ん」

玲の頬に唇を付けた。悠斗が言ったとおり、玲に『ちゅう』をしたのだ。された玲は既にへブン状態！といったような感じで、悠斗を思いつきり抱きしめて頬ずりをする。

「あゝ！やっぱりゅーちゃんは可愛いなあゝ！」

「あゝ母さん？俺今日めだかちゃんと善吉と遊びに行くから。」

「分かった！」

どうにか玲の呪縛から解き放たれた悠斗は玲の許可が下りたことを知らせに玄関に向かう。・・・・・・後ろで未だにへブン状態！になっている玲は無視することにして。

玄関のドアを開けて靴を履いて外に出る。と、めだかが眉を逆八の字型にして待っていた。善吉はいつも通りニコニコしている。

「・・・・・・・・・・遅い。」

そうめだかが呟いた。だって母さん起こすのに『ちゅう』しなきゃいけないかったんだ、とは口が裂けてもいえなかった悠斗だった。

「今日は何処で遊ぶんだ？」

珍しく歩きで悠斗の家まで来ためだかと善吉にどこで遊ぶのか聞くと、善吉が手を上げて元気良く、

「今日は僕の家で遊ぶんだよー！」

と言った。善吉の家か・・・と悠斗は考え込んだ。確か善吉の家は悠斗自身言ったことのな所だ。いつも遊ぶのはめだかの家なので今

回もそうだと思っていたのだが、初めていくところならば興味が出てくる。

「ほら、あそこが僕の家だよー！」

と考えている内に善吉の家に着いたようだ。善吉が指を指すほうに目を向ける。善吉の家は、大きくもなく、小さくも無い、普通の一軒家だった。

ただいまー！と家に入りながら大きな声で家族に帰ったことを知らせる善吉。善吉を迎えるために誰かがパタパタとスリッパを鳴らしながら玄関に近づいてくる。

「お帰りー善吉ちゃん」

そんな口リボイスと共に現れたのは、小さな女の子。背丈は丁度善吉と同じくらいだ。髪は善吉と同じ色をしており、家の中なのに白衣を着ている。

一見善吉の妹か姉に見えるのだが間違うことなかれ、この少女は人吉瞳・・・善吉の母親なのだ。まさか合法口リを間近でみることの出来なかった悠斗は少し感動していた。

瞳はいつも善吉と遊んでいるめだかのほかに誰か居ることに気が付いたらしく善吉に聞いていた。

「ねえ、その子は？」

「悠斗君っていうんだ！僕の友達だよ！」

友達、そうハッキリ言われると少し照れくさくなった悠斗。瞳はへえ・・・と気づかれないように悠斗を観察していた。と善吉が二人と遊ぶために靴を脱いで居間らしき部屋に入っていた。めだかも瞳に一礼して靴を脱いで善吉の入っていた部屋に行った。

悠斗も瞳に一礼して靴を脱いで向かおうとして、

「ちょっと待って。」

悠斗の前に、瞳が立ちふさがった。

人吉瞳は元心療外科医だ、あくまでも元だが。

球磨川禊という余りにも負^{マイナス}完全な子供から脅迫を受けた人吉瞳は、球磨川を見逃したことに負い目を感じ、医者を辞めてしまった。

それほどまでに球磨川禊という子供との出会いは衝撃的であり、結果は最悪の方向に向かってしまったのだ。

だが、今医者を辞めてしまった身とはいえ、今目の前に居る^{アフノーマル}異常な子供を放っておくわけにはいかなかった。

もう失くしてしまった医者の魂がまた燃え上がったのかもしれない。そう感じながらも瞳は悠斗に話しかけた。

「キミは、自分が異常だと分かってる？」

「ええ、分かってますが何か？」

聞いた瞳が呆気にとられるほど、悠斗は自分が異常だとハッキリ答えた。それは漠然として異常を理解している訳で言うてはなく、悠斗は自分の異常を全て理解したうえでそう答えたのだと理解するのに時間がかかった。

「異常、異常・・・ねえ？よっぽど大人の人は幼い子供が自分以上の能力スキルを持つてるのが怖いんですね。」

「・・・私自身子供の時異常だ異常だと言われてきたからね、私にはそんな気持ちが理解できないけど、普通ノーマルな人はそう思うんじゃない？」

「なるほど・・・。」

「だけど、キミは間違いなく異常よ。今はやめちゃったけど、私元医者なの。キミみたいな異常な子を世になじませるのが仕事だった。だから図々しいと思うけど、キミを——」

「だから俺は捨てられたんですね？」

瞳の言葉を遮って、悠斗はそう言った。その時、瞳はそう言った悠斗の目を見た。

「――ッ!?!」

光さえも通さないドス黒く濁ったその目、それは何処までも黒く、そして恐ろしいものだった。幼い子供に……。いや、人間にコレほどまでに濁った目マインスをすることが出来るのか。医者を辞める切欠になった楔以上の過負荷を、悠斗は胸の内に抱えていた。

瞳はコレほどまで堕ちてしまった子供が可哀想で、そして自分が情けなかった。

自分は辞めてしまったとはいえ、こんな子供が出てくるのを防ぐために働いていたのではなかったのか？そんな問答が頭の中を駆け巡り、そして。

「まあしょうがないか。」

あっけらかんと、悠斗はそう締めくくった。

「え？」

「過去の事悔やんだところで何も起きないですからね。それに今は

拾ってくれた母さんが居ますから。」

苦笑しながら手をヒラヒラ振る。その目に、先ほどまでの濁りは見受けられない。逆に目に明るさが増したかのように思えた。

有得ないほどの大きさの負を持っているにもかかわらず、それを受け入れ、正の一部にしている。こんな子供は初めて見た。

「おーいゆう君！早くこっち着て遊ぼうよ！」

「あーい！今行く！」

中々悠斗がこないのを不思議に思ったのか、ひょっこり顔を覗かせて悠斗を呼ぶ善吉。それに返事をするコクリと頷いて顔を部屋に戻した。

じゃあ、と一礼して部屋に向かおうとする悠斗に瞳は、

「悠斗君、善吉ちゃんをよろしくね。」

「……まあ善吉は俺の大切な男友達ですからね、よろしく言われなくてもやっていきますよ。」

「…………え？」

と悠斗のある一単語に、瞳は首を傾げた。悠斗はその声にん？と振り向いた。瞳は首を傾げながら悠斗に言った。

「善吉ちゃんは女の子よ？」

「…………え？」

第七条・オセロ（前書き）

遅くなつて申し訳ない。プロットは紙にちよこちよこ書いてあつたんですが、何故かp cに打ち込む気が無くなつていたんです。本当に申し分けない。

あ、後TSさせて欲しいキャラなどが居たらドシドシ感想に書いてください！

第七条・オセロ

瞳の激白を受けた悠斗は、その言葉を理解するのにしばらく時間が必要だった。何せ実の母親が自分の息子である善吉を女だといったのだから。

ようやくそのことを理解した悠斗は、とにかく本人から直接確認を取るために、善吉たちが遊んでいるであろう部屋へ足を運んで聞いたのだが……。

「え、僕？僕は女の子だよ？」

迷うそぶりも見せずハッキリと、善吉は自分の口から自分は女だと答えた。それを聞いた悠斗は茫然とした表情で隣にいた瞳に問うた。

「……何で女の子なのに男の子の名前をつけてるんですか？」

瞳は軽快に笑いながら答えた。

「いやあ、本当は男の子が良かったんだけどね。でも善吉ちゃん女の子だから、せめて男の子みたいな名前を付けて、元気に逞しく育って欲しいのよん」

悠斗はその理由に抗議しようと口を開こうとする、が。その瞬間服の袖を誰かにグイッと引つ張られた。開きかけた口をとりあえず閉じて振り向くと、そこには頬を膨らませた善吉がいた。

「ねえ、早く遊ぼうよお！」

グイグイ引つ張ってくる善吉が女の子だということが分かってしまった悠斗は善吉にどういったらいいか分からずに言葉に詰まる。

瞳に助けを求めようとして振り返れば、そこには誰も居なかった。キッチンらしき場所から鼻歌が聞こえることから、どうやらお菓子や飲み物を用意しに行ったらしい。

悠斗はとりあえず善吉に抵抗の意思が無いことを示すと、善吉は嬉々とした表情で悠斗を遊びの場に引き込んだ。

見てみると、どうやら二人でオセロをしていたらしい。まあ盤の色がほとんど白だということを除けば楽しくやっていたのだろう。

ボロ負けどころかフルボッコにされたと思わしき善吉は、悔しさの表情を出すわけでもなく、かといって泣き出すわけでもなく。唯、尊敬するような表情を善吉はめだかに向けていた。

「めだかちゃんってすごく強いんだよ！ゆう君もやってみなよ！」

常人には無い、こういった感性。相手の能力と自分の能力を比べて、負の感情を引き出さない。逆に相手の能力を尊敬し、褒める。そして、何時か自分もあいつた存在になりたいと願い、努力する。

そこが善吉の良いところであり、だからこそ異常な奴等アフノーマルと対等に戦えるのかも知れない。

そう再び考えながら、誘われたとおりめだかと対戦するため、悠斗はオセロの盤の前に座った。

めだかは今、善吉の家出悠斗とオセロで勝負をしようとしていた。

先ほどまで勝負をしていた善吉と打っていた石を取り除いて平等に配る悠斗を見るめだかの目は真剣そのものだった。

頭の良さなら自信がある。めだかは一歳の誕生日を迎える頃には、既に膨大な量の知識をその頭の中に詰め込んでいた。

最初こそはそんな彼女を大人たちはもてはやしたが、直に気味悪がつてめだかから離れていった。

それは奇しくも悠斗と同じ理由だった。

人は自分を森羅万象——あらゆる物事から自分を拒絶して自身を確立する。その確立した人と人が出会い、共鳴しあえば、それが一つのグループになる。

そのグループがいくつも、いくつも作られている今。その何処のグループにも属せない、異常な人間。^{おかし}

そんな人間は、誰とも共鳴しあうことも無く、更には普通なグルー^{せいじょう}プからは拒絶される。それは個々を確立させるための拒絶ではなく、人として、相手を拒絶する、^{かくり}という意味で、だ。

それは、他者と自分との差異を確認する軸線が自分達によって共有

されており、その軸線がその形成の歴史を忘却し、『自然』的な物
とみなされるから。そしてそれを共有しないもの——めだか
や悠斗のことだが——は、普通では無いものじぶんたち「普通」でな
いもの』として否認されるのだ。

人が自分の存在に形を与えていくこの過程は、きわめて政治的であ
る。それは常に解釈の基準を提示し、それを外れるものには欠陥や
劣性といった否定的な眼差しで見えることを強制し、そしてその基準
を共有できない、あるいは基準すらないものを己から排除するから
だ。

そんな排除された者同士が、今共鳴しあっている。少なくとも、め
だかはそう思っていた。

こんなにも嬉しいことはなかった。孤独だったものが、孤独ではな
くなり、不安が安心に変わるのを、彼女は彼に初めて挑んだ瞬間か
ら感じたのだ。

相手は格上。相手は別格。相手は——規格外。バケモノ

だが、自分も異常。バケモノ負ける道理は在ろうとも、勝てない道理は存在
しない。

だから、一切の迷いを棄て、一切の余裕を棄て、そして、一切の手加減を棄てた。

挑む。そして勝つ。そのための一步を、めだかは踏み出すために石を置いた。

悠斗はそれを見て少し考え込むと、悠斗もまた石を置いた。

思考、設置、思考・・・暫くの間、そんな光景が続いていた。そしてついに置ける場所が無くなった。集中しすぎていたのか、めだかは盤を改めて見る。そして息が詰まりそうになった。

「うわぁ！すごいすごい！」

善吉の感嘆した声だけが、部屋に響き渡った。

「これは・・・顔・・・か・・・？」

そう、盤の石がまるで顔のようになっていたのだ。それはまるで慈母のような微笑。

「あーあー。負けちゃったかぁ。あ、善吉、ちょっとトイレ借りる

ぞー。」

その顔の目や口の部分を形成している黒の石を打っていた悠斗は、善吉にそういつて席を立った。

トイレに向かうためにドアに近づく。それは必然的にめだかの脇を通り、

「まだまだだね。」

めだかにしか聞こえないような囁きでそう言った。めだかは即座に振り向くと、悠斗は既に背中を向けていた。

その背中とは、余りにも大きく、そして余りにも遠い。だが、不思議と絶望はしなかった。それは何故か。

大きければ自分も大きくなればいい。遠ければ近づけばいい。そして何時か、彼の隣に立つ。そんな覚悟がめだかの心中に渦巻いていた。

そう決心しためだかは、とりあえず自分からしてみればドヤ顔にしか見えない顔をオセロで作った悠斗にどう憂さ晴らしと悔しさをぶつけようかと考えることにした。

日記

今日は善吉の家でめだかと善吉と一緒に遊んだ。善吉に誘われるがままにめだかと対戦することになったのだが、ちよつと面白い事を思いついたので実行してみた。そしてそれが成功したのでトイレに行く際にめだかに声を掛けてやった。用を足した後、キマツてたなあと自画自賛してると部屋に入った瞬間にめだかに飛び掛られた。そのまま受け止めてやるとぽかぽかと俺のことを叩いてきた。そうとう悔しかったらしい。叩いている姿を見ると可愛らしいが、威力は洒落にならない。反射しようにも、それでは衝撃がめだかにいつてしまい、怪我をさせてしまう。そうしているとめだかの拳が額を掠った。血が出た。幸い深いものではなかったので、絆創膏を張った。めだかと善吉は気づいてないようだった。早く力の制御を覚えて欲しいものだ。後善吉が女だった。コレには驚いた。もしかしたらココはパラレルワールドなのかもしれない。この先何がどうなっ

て誰がどうなっているのか分からない。鍛錬は欠かさずに行うことにしよう。P S・善吉の母はやっぱり合法ロ——（文
字が掠れてこれ以上読めない）

第八条・家出（前書き）

久しぶりに書いたら書いてることがg d g d・・・オデノカラダハ
ボドボドダー

どうか寛大な心で見てくださいね！あ、後ツイッターはじめました。p a n
d o r a | 1 1 1 5です。よかったらフォローしてもらえると嬉しいです。

第八条・家出

「オレ、この家から出て行こうかと思うんだ。」

「あつそ。」

「イデデデデデデデ！」

返答が適當すぎたため、くじらに思いっきり頬を抓られる悠斗。不貞腐れながらくじらは抓っていた頬から手を離す。

「いやいや、重大発表だってーのに何その返答。頭可笑いんじゃないかねーか？」

「何処も可笑しいところはないな。」

そう切り返すと悠斗は視線を先ほどまで読んでいた本に戻す、くじらがその本を取り上げてしまった。パタンと閉じてしまいが、その際栞を挟んでくれるのはありがたかった。

読んでいた本を取り上げられ、浅いため息を吐きながら悠斗はくじらのほうに向き直った。

「まあ一応理由だけは聞いておこう。」

「理由、ね。言うなれば視点をずらすためだ。」

「視点をずらす・・・？」

「そう、視点だ。オレは今日この日まで恵まれた環境で勉学に励んできた。だけど、その視点かんきょうだけじゃダメなんだ。」

ふむ、と悠斗はくじらの言い分に耳を傾ける。

「違う視点かんきょうで生活すれば、何かが変わる。そりや今までの充実した生活とは一変するけど、それだけじゃないんだ。オレ、アンタに前言ったろ？『素晴らしいものは地獄からしか生まれない』ってさ。」

今までの充実した生活でも素晴らしいものは出来た。」

「だから底辺での生活を通して違うものを作り出したいと？」

コクリとくじらは神妙な顔つきで頷いた。悠斗は再度ため息をついて後頭部をガリガリと搔くと、口を開いた。

「底辺での生活を望むんだったらそれはお前の意思だからいいんじゃないのか？でも残される奴の立場を考えていつてるのかお前は？」

うつ、とくじらは言葉に詰まる。その様子を見て悠斗は半眼になる。

「考えてなかったな。」

「……うつせ。」

事実、くじらの性格はそれなりに丸く収まっている。悠斗があつた時のように図書室に籠りつきりということは無くなったし、それなりに外で遊ぶようになった。

だからこそだろう。そう簡単に自分の望みの為に、家族を切り捨てることを躊躇うのは。

真黒は言わずもがなくじらは自分の妹であるからして持てる全ての愛情をくじらとめだかに注いでいるし、めだかはめだかで悠斗が居ない間はくじらの後を着いていつていられるらしい。

その愛情をくじらは感じている。それは竊っていたときとは段違いなほどに。だから切り捨てられない。自分が居なくなった後の、皆の顔が頭に浮かんでしまう。

でも、じゃあ。

「アンタはどーなんだよ。」

「ん？」

「アンタはどーなんだって聞いてんだ。色々説教垂れてるけど、アンタはオレの家出にどー思ってるんだよ。」

んー、と背中を座っている椅子の背もたれに十分に凭れ掛かって、図書室の無機質な天井を眺めて考えを頭の中で巡らせる。と、考えが纏まったのか、悠斗は開いた口から言葉を発した。

「反対でもあるし賛成でもある。俺は誰かの道を決めるなんて事は出来ないからなあ・・・出来るのは、自分の疑問をそのまま相手に言う事だけだし。」

「偉そうに説教垂れて、結局は中立かよ。」

「説教ではないつもりなんだがな。・・・中立、ねえ。だって俺はそこまで他人の人生に関与するつもりはないし。もし自分が関わって相手の人生がメチャクチャになったら俺、罪悪感で一杯になっちゃうよ。」

その言い分に、ハッとくじらは鼻で笑う。

「罪悪感なんてこれっぽっちも無いくせに、よく言っぜ。」

「いやいや、俺にだって罪悪感はあるからな？意外と小心者だからな？」

パタパタと手を振りながら、悠斗はくじらの反論に対して言い返す。くじらは傍にあった水をグイッと一気に飲み干すと、決心を固めた。

「・・・オレ、やっぱ家を出るわ。」

「・・・そーかい。ま、お前の人生だ。いいんじゃないか？」

やはり、くじらは家を出るようだった。悠斗はやっぱり、といった声色でそう答えると思いつきり伸びをする。パキパキと心地良い音が背中から響く。

「まあめだかには説明をしとけ。ああ見えて結構脆いところがあるからな。」

「アイツには説明をするけど・・・何で妹限定なんだ？」

「あ？お前真黒にも説明するつもりか？別に止めやしないが・・・。」

「・・・あー分かった。ああ、止めとく。うん。」

くじらはその理由を直に察知して、首を振る。

もしもくじらが真黒に家出するなんて事を言つと、どうなるか分かったものじゃない。発狂するか、絶望するか、怒り狂うか・・・想像しただけでも恐ろしい。キモチワルイ

ブルツとそのことを想像してくじらは身震いする。悠斗はその様子を見てクククツと喉の奥で笑った。

「安心しろよ。真黒には俺からちゃんと話をしといてやる。」

何だかんだいって、悠斗もくじらのことを心配しているのだ。くじらはそんな悠斗の優しさを感じ、その胸に飛び込んだ。

うつといて息を詰まらせる悠斗。視線を下にずらしてくじらに問いかける。

「どーしたよ。」

「もう明日には出るつもりだったんだ。用意もしてる。・・・暫くアンタに会えなくなると思ってな。」

もう悠斗が何を言おうとも、くじらはこの家を出て行くつもりらなかった。もしかしたら、くじらは相談ではなく悠斗にお別れの言葉を言いに来たのかもしれない。

ジワリ、と一枚しか着ていないシャツが湿り気を帯びる。それはくじらが今まさに顔をうずめている場所からだった。

寂しいから。せめて最後に甘えさせて。何事も斜に構えて物事を受け止めていたくじらに、そのことは言い辛かったのかもしれない。それは相手が悠斗だからか。自分を変えてくれた大切な人だからか。それとも――、

そんな事をぼんやり考えながら、悠斗は優しくくじらの背中を擦ってやった。

次の日の中学校にて、何時もうるさい妹魂まぐろが欠席していた。理由は簡単に想定できる。くじらの家出だろう。まあ想定も何も今日の朝真黒から電話があったから絶対にそうだ。

『くじらちゃんが家出しちゃったああああああ！』

開口一番大声でそう叫ばれた。寝ぼけ眼で電話を取った悠斗にはいい目覚ましだった。

『朝起きたらくじらちゃんの机の上に置手紙があったんだ！うう・・・どこにいったんだくじらちゃん・・・。』

理由を知っている悠斗としてはダルいものだったが、この状態の真黒はどうにも手がつけられない。親馬鹿モードの玲と同じだ。悠斗にも止められない。

その後ググチとくじらの心配を聞かされ、最後に病気で学校を休むということを告げられ、電話を切られた。学校を休むのは早速くじらを見つげるために黒神グループを総動員させて搜索を始めるためだろう。

ちゃんと卒業できるぐらいには出席しろと悠斗は言ったのだが、聞こえているのかは怪しい。

その後真黒に内緒でめだかにコンタクトを取った。どうやらめだかにはちゃんと説明がいきわたっていたらしい。真黒には絶対に言うなということはかなり念に押されたらしいが。

表面上はいつも通りに振舞っていたが、長い間一緒に居た悠斗には分かっていた。

めだかの声が、少し震えていたことを。

やはりめだかも寂しいのだろう。家族の一人が理由つきとはいえ居なくなってしまったのだから。でも、それは表面には出さないようにしている。お姉さまの意思を尊重すると言ったらしいが、やはり精神はまだ子供の部分があるらしい。

ま、そっちのほう人間らしいよな。と悠斗は少し笑いながらそう思うと同時に、めだかも慰めなきゃなあ・・・とどうやってめだかを慰めようと頭をフル回転させていた。

「フフフフフ・・・くじらちゃん、絶対に見つけて見せるからね・・・フフフフフ・・・。」

願わくば、最悪くじらが真黒に見つからないようにと願いながら――

第九条・副会長と会長（前書き）

無理やりなフラグ？強引な進め方？気にするな！（このネタ分かる人いるのかなあ・・・。）

第九条・副会長と会長

バシャリ

雨が降って出来た水溜りからそんな音が聞こえた。明らかに水溜りに足を突っ込んだ音ではない。何か、もっと重いものが倒れこんだ音……例えば――人間。

白に近い水色の髪の毛、小柄な体格、赤いネックウオーマー。そんな人間が雨の日に傘もささずに水溜りの中に突っ込んだ。

だが、その人間は身動き一つしない。感情の無い眼球、暗い、昏い、瞳で倒れたまま何処かを見つめていた。いや、実際は何処も見えてはいないのかもしれない。

空から降ってくる大粒の雨に打たれながらその人間は、何も考えては居なかった。否、考える余裕が無いといったほうが正解か。

自分の持つ『異常』^{アブノーマル}である電波を受信する。そのせいで彼は思考する、ということが難しくなってしまった。それは自分が思考する前に、相手の思考が頭の中に入ってくるからだ。

人間の人口が激増したこの世の中、四方八方から来る思考をシャッ

トダウンすることは不可能だ。しかもその思考は、言葉にならない何か。正確には読み取れない言語だ。

その人間の『異常』^{アブノーマル}は珍しく繊細だ。だからその能力を最大限にまで引き出すには、特定の人間に狙いを定め、細かなチューニングをしなくてはならないのだが。

膨大な数の人間。そんな社会で特定の人間に狙いを定められるはずもなく、流れ来る意味不明の大音量の言語を聞き取りながら細かなチューニングをするというのは無理な話だろう。

まして能力は人間だけではなく機械にまで能力は及ぶ。そう、思考するはずもない機械にまで。

機械社会が発達しすぎた日本の中で、聞き取りたくないことまで聞こえる。目を閉じようが耳を塞ごうが無意味。皮膚全体で電波を受信するからだ。受信を止めたければ全身の皮膚を剥がさない限り不可能だ。

そんな社会の中、その人間の精神は壊れることも許されず、崩れることも許されなかった。許されたのは唯々精神を衰退させることだけ。

誰も居ない場所、住宅街があるが電磁波はココまで届かないようだ。

久しぶりにそんなことを考えることが出来た。と、不意に体中を打つ雨の感触が無くなった。

視線を上にならしてみようと、見える真っ黒の髪の毛、不機嫌そうに潜められた眉。どうやら傘を差しているらしく、その傘に覆われているらしい。

グイッと手を掴まれる。ああ、また思考を読まなければならないのかとぼんやり思っていると、少年はヒョイとおんぶをした。が、驚くのはそこではない。

心が読めない。

そう、機械に対しても作動する能力が彼に限って作動しない。何故？何故？何故？

唯一分かっているのは一つだけ。この少年の背中は一——
暖かい。

バシャバシャ

雨の日は気分を憂鬱にする、なんて誰かがいつていた気がするな。
と悠斗はぼんやり窓の外を見ていた。

授業は数学、悠斗にとっては勉強する価値も無い科目だ。唯脳の中で演算をすればいい話だからだ。

そんなことは露知らず、担任の数学教師は授業に集中せずに窓の外を見つめる悠斗に少し怒りを覚えていた。自分の授業を真剣に聞かない生徒が居れば誰だってそうだろう。

その担任は悠斗に恥をかかせるため、高校、それも3年生レベルの問題を悠斗に出した。

「おい十六夜、この問題を解いてみる。」

黒板に書いた問題を指差すと他の生徒からうわ・・・と声が上がった。無理も無い、見ただけで解けそうに無い問題を指差しているのだから。

教師は満足気にその声を聞き、悠斗のほうに目を移した。悠斗はやはりぼんやり黒板を見て、そして席を立った。

そのまま黒板まで歩いていき、チョークを手取る。その光景を教師は蔑んだ目で見ていた。どうせ解けない、そのまま固まるのがオチだろう。

そうニヤニヤしていた教師の顔は、淀みなく動くチョークが進んでいくにつれ、焦りの表情に変わっていった。

カツン、と悠斗がチョークを手放すと顔を教師に向けて口を開く。

「コレでいいですか？」

書かれた文字を見て、特別に用意した問題集の答えを見比べても、合っている。

「あ、ああ、いいぞ。席にもどね。」

悔しさで声が震える。悠斗はそのまま窓側の席まで悠々と歩いていく。その際席に座っている生徒から褒められている光景が更に教師を辱しめる。

そのまま席に戻った悠斗はまたぼんやり外を眺め続ける。

雨って皆は嫌いだって言うけど、俺は好きなんだよな。何となく。

バシャバシャ

雨が降ったせいか、少しじめじめした廊下を歩いていると、進行先

に誰かが立ちふさがった。

「やあ、奇遇だね悠斗君。」

「・・・奇遇も何も、お前の方から来たんじゃないか。安心院あしむよ。」

「イヤだなあ、僕の事は安心院あんしんいんって呼んでよ。そっちのほうが慣れるからさ。」

微笑を崩さずに悠斗に接する彼女は『安心院あしむなじみ』。皆からは『親しみ』を込めて安心院あんしんいんと呼ばれているのだが、悠斗は安心院あしむと呼んで通している。

「つるせ、本名で呼んで何が悪い。」

「・・・まつ、いいか。それよりも悠斗、会長が呼んでるよ。」

「・・・球磨川が？俺に何か用でもあるのか？」

「さあ？僕は『呼んできてー』って言われただけだし。でも、キミに会うのもいいかなーって思ってたね。」

クスクス笑う安心院に悠斗は思ったとおりの答えが聞きだせず、嘆息した。とにかくにも悠斗は伝えられた通り、球磨川の所に向かうとして、

「・・・だからさ、会ったびキスしようとするなよ。」

「む、いいじゃないか。僕みたいな可愛い子にキスしてもらえるんだから。」

「お前の目的は俺の『アクセラレータ一方通行』だろ？キスするのは『リップサービス口写し』を使うためだろうしな。」

不満そうだった安心院の顔が、また微笑に変わった。

「バレた？」

「バレバレだな。何で俺の『アクセラレータ一方通行』を狙う？というか何で知ってる？」

「ま、何で知ってるのかは企業秘密さ。キミの能力を狙うのはねそう、珍しいからさ。」

「・・・珍しい？」

珍しい、という発言に眉をひそめる悠斗。安心院はその表情をみて更にクスクス笑う。

「そう、『異常性^{アブノーマル}』でも『過負荷^{マイナス}』でもありえない『規格外^{アウトロー}』。それがキミの『一方通行^{アクセラレータ}』なんだ。7932兆1354億4152万3222個の『異常性^{アブノーマル}』と4925兆9165億2611万643個の過負荷^{マイナス}、合わせて1京2858兆519億6763万3865個のスキルを持つ僕だって持っていない『規格外^{アウトロー}』だぜ？欲しいに決まってる。」

手を広げて説明する安心院に悠斗は少しげんなりする。せつかく自分の尊敬するキャラの超能力^{チカラ}をもらったというのに、それを狙われるなんて思いもしなかったから。しかもその理由が唯単に珍しいからという安易な理由だったのもそうだ。

「とにかく俺のは渡さないし、ファーストキスも渡さん。俺はもう行くぞ。」

そういうと安心院の横を抜けて、自分と呼んでいる球磨川の元に向かっていった。その場に残された安心院は一人ポツリと呟いた。

「うーん・・・適当な理由付けてみたけど、やっぱりガード固いなあ・・・。けど、」

フフフ、と悠斗の前では出したことのないような妖艶な笑みを浮かべると唇に指を滑らせる。既に遠くなりつつある悠斗の背中を熱い視線で見つめながら、呟く。

「生憎と僕もファーストキスなんだよね。何時か悠斗、キミに捧げて、あ・げ・る」

「『やあ悠斗さん!』『来てくれて嬉しいよ!』『今お茶入れるね!』」

生徒会室のドアを開けるとこちらに気づいた球磨川が顔を輝かせて

いそいそとお茶を入れるために動き出す。そんな球磨川が歩くと揺れる、『スカート』

悠斗が席に着くと出来上がったのか、緑茶を差し出して自分は向かいの席に座った球磨川の胸が『少し膨れ上がっている』。

ニコニコ笑っている球磨川。彼・・・いや『彼女』はお茶をすすっている悠斗を唯ニコニコ笑いながら見つめている。

悠斗はそんな視線に耐えられなくなったのか、球磨川に向かって口を開く。

「おい、早く俺を呼んだ理由を説明してくれ。」

「『んー？』『ああ！呼んだ理由だったね！』『呼んだ理由は・・・』」

依然ニコニコ笑い続けている球磨川はジト目で自分を見続ける悠斗を見つめ返し、熱い吐息と共に、

「『悠斗さん』『僕と付き合ってくれないかな？』」

第十条・実力行使

「いや無理。」

球磨川から告白を受けた悠斗は出されたお茶を啜りながら瞬時に答えを返した。球磨川は断られたにもかかわらず、ニコニコしている。

「『んー』『一応理由だけでも』『聞いていいですか?』『』」

「いや俺もう受験生だし、そういうことに時間を割けないんだよ。ちよつとでもいい高校にいかないと大学進学にも関ってくるからな。」

「『じゃあ高校に入ったら』『付き合ってくれるんですか?』『』」

「お前が俺の恋愛対象内に入ったらな。」

簡単にそう返すと、お盆の中に入っている煎餅を取り出して齧る。とその瞬間。

ドガッ!と悠斗が勢いよく後ろに倒れこんだ。幸いお茶は机の上に置いていたおかげで倒れることはなかった。倒れこんだ理由は至極

簡単。球磨川が悠斗の首を掴んで押し倒したからだ。

カラカラと食べかけの煎餅がフローリングの床を滑る。球磨川は仰向けに倒れこんだ悠斗の腹に座り込んで顔を近づける。

「『ねえ』『僕はまだ貴方の恋愛対象外にいるんですか？』『こんなにも愛を語り続けてるのに？』」

「恋愛対象内に入りたいならもつと自分を磨くことだ。少なくともヤンデレはお断りだな。」

悠斗の返しに球磨川の手に力がいつそう加わる。が、首を絞められているはずの悠斗は涼しげな顔で球磨川の顔を見続ける。

「実力行使で出来ると思うなよ。お前じゃ俺を屈服させれない。」

悠斗は自分の首を絞めている球磨川の両手を外しにかかる。正確には球磨川の指だが。

いかに力を込めようが、その力の方向を操作ベクトルされては何も出来ない。一つずつ指を外されていくのを球磨川は悔しげな顔で見ているだけしか出来ない。

すべての指を外し終わると、悠斗は球磨川を持ち上げて自分の上から退かす。そしてダン！と床を叩くような音が響いた。

仰向けに倒れていた悠斗が、どういつベクトルを操作したのか、ドア板が開閉するような動きで起き上がった。

「『ズルイなあ』『その力』『どうなってるんですか？』」

「企業秘密って奴さ。」

適当に返すと滑って壁に当たった煎餅を拾い上げる。パツパツと煎餅に付いた埃を払うと残りの部分を一気に口の中に放り込んだ。お茶で一氣に胃袋の中に流し込むと部屋の脇に置いておいた鞆を肩に引っさげて部屋を後にする。と、一言。

「ま、氣長に待つよ。」

それだけ言って、ドアを閉めて出て行った。残された球磨川は呆然と悠斗の言葉を反芻する。

「『氣長に待つ？』『え？』『僕を？』『悠斗さんの恋愛対象内に入るまで待ってくれるの？』『うわぁ・・・』『どうしよう・・・』」

「

珍しく取り乱す球磨川。赤くなった頬に先ほどまで悠斗の首を絞めていた両手を添えて悶える。悠斗が肩越しに球磨川を見ながら言ったことも、球磨川を悶えさせている原因だ。

「『ああ・・・』 また好きになっちゃうじゃないですか・・・』」

ペタリとお尻をつける女の子座りをしながら、球磨川はしばらくその場で悶え続けていた。

「・・・お前は俺をつける趣味でもあるのか？」

「やだなあ、『たまたま』帰るのが一緒になっただけじゃないか。ああ、この際一緒に帰ろうぜ。」

頭痛を堪えるように米神を抑える悠斗の前にいるのは先ほど会った安心院なじみ。相も変わらずクスクス笑っている。

上履きを下駄箱に仕舞い込み、外履きに履き替える。言ったとおり、安心院は悠斗と一緒に帰るつもりらしく、外に出た悠斗についていく。

雨が降っている為傘を広げる悠斗だが、安心院は傘を開くどころか持ってすらいなかった。

「ん、安心院。お前傘はどうした？」

「いやーどうも傘を忘れちゃったんだよね。いやー困った困った。誰か一緒に傘に入れてくれる人はいないかなー。」

チラッチラツとワザとらしく悠斗に視線を送りながら安心院は困ったような口調で独り言を呟く。

雨は朝から降っていたはずだ。傘を持っていないという事はあるえない。というか現に安心院の少し開いたバッグの間から折り畳み傘

が見えている。

「おい安心院、お前その折り畳み傘は――」

「あー誰か入れてくれないかなー。」

チラッチラッ

「だからその折りたたみ――」

「誰でもいいんだけどなー。」

チラッチラッ

「おいあじ――」

「そんな優しい人、何処かに居ないかなー。」

チラッチラッ

「・・・・・・・・」

「いやー流石悠斗、優しいねー。」

「・・・・・・・・それはどーも。」

結局悠斗が折れる形に収まり、安心院は悠斗の傘に入っている。げんなりとした表情で悠斗は適当に返事をする。

「そんなに邪険に扱わないでくれよ。それでも結構傷つきやすい心なんだぜ？」

「何が傷つきやすい心だ。へらへら笑ってる奴にそういうことは言

われたくないね。」

へっと思院の望みを一蹴して歩を進める。が、その歩はすぐに止められることになる。前に現れた男達の集団のせいだ。いかにも不良というような雰囲気を出している。改造している制服から、辛うじて他校の生徒だということが分かる。

その集団はへらへら笑いながら悠斗たちに近づき、その中の一人が声をかける。

「なあその姉ちゃん。俺たちと一緒に遊びにいかねえ？」

「悪いようにはしねえからさあー。」

「隣の奴と一緒に居るより楽しいことが出来るぜ？」

どうやら悠斗の隣に居る安心院を対象にしたナンパのようだ。それもそうだろう。安心院は外見は清楚でお淑やかな女の子だからだ。そう、外見は。

チラリ、と悠斗は安心院の様子を伺う。顔は俯いて表情を読み取れない、がコレは危険な状況だ。安心院は悠斗と一緒にいる時間を邪魔されることを酷く嫌う傾向がある。そう、邪魔した者を良くて半

殺し、悪ければ殺してしまうほどに。

だから悠斗はグイッと傘を安心院に押し付けて前に出た。傘の範囲内から出たため悠斗に雨が降り注ぐが、悠斗の体に触れた水滴は悠斗の体を濡らすこと無く地面に落ちていく。

「ああん？何だ？彼女の前だからって格好付けようってか？」

「解釈はそっちに任せる。ま、どっちにしたってお前等は俺が叩き潰すから。」

あ？と安い挑発に乗った不良共がガンを飛ばして威嚇する。額に青筋を浮かばせてそれぞれが悠斗をボコボコにするための準備を始める。

金属バットを取り出す者、バタフライナイフを懷から出して刃を出したり引っ込めたりする者、指を鳴らして威嚇する者。

対する悠斗は自然体。何をする訳でもなく、何かを取り出すわけもない。唯悠然とその場に立って相手を見据えているだけ。

「手前エ、一度ボコされなきゃ分かんねえようだな……。」

「その綺麗な顔、誰だか分かんなくしてやろうかア？」

その安っぽい脅しに、悠斗は嘆息する。

「三下が。ギャアギャア吠えてる暇があんだったらかかって来い、そうやって吠えてるから手前エ等は何時まで経っても三下なんだよ。」

今度こそ、不良達はキレて悠斗に襲い掛かった。拳、バット、ナイフといった凶器が悠斗に殺到するが、ここに来て、悠斗は何もせずに佇んでいる。

そして、その凶器が悠斗に触れたその瞬間。

「……え？」

怒りに顔を歪ませて、悠斗に突きたてようとしたナイフが折れ曲がっている。そう、まるで突きたてようとした力がナイフに返ってきたかのように。そして、その返ってきた力はナイフを折れ曲がらせるだけに留まらず、持ち主の手首の骨までも折っていた。

「い、ぎゃあああああああ！」

そこでやっと痛覚が追いついたのか、ナイフを持っていた青年が叫び声を上げて地面に転がり込む。他の不良達は自分の仲間がやられた事を理解し、さらに怒りの上限を上げる。が、それが命取りになることを不良達は気づけなかった。

何故ナイフが折れ曲がり、仲間の手首を折ったのか。それを考えていればその場から離脱するという選択肢が出てきただろう。そしてその選択肢こそ不良達が取れる最善の選択肢だ。だがそうであるにも関わらず、不良建ちはその選択肢を選ぶどころか出しさえもしなかった。

バットで殴りつけようものならバットはひしゃげて手首は逆の方向に折れ曲がる。拳で殴りかかれば指の骨は折れ、腕の骨にも罅が入る。地面に転がっている石を投げればそれは悠斗に当たった瞬間に自分目掛けて飛んでくる。

不良達が勝てる要素など、何処にも無かった。

「あ、ぎィ・・・・・・・・・・！？」

「痛ィ・・・・・・・・痛ィよオ・・・・・・・・。」

悠斗に襲い掛かった不良全員が地に伏すまでさほど時間はかからなかった。呻く不良達を一瞥すると、悠斗は安心院の元に戻った。

「帰るぞ。」

傘を安心院からもぎ取ると、悠斗は歩を進める。ついてくる安心院の表情はうれしそうに笑っている。

「悠斗にも女の子を守るっていう行動があっただね。」

本当は、こんな住宅地でスプラッタな不良達の死体オフジェを見たくないからなのだが、悠斗は何も言わずに歩く。そういつたら大変なことになるそうだし。

と、そんなハプニングがありながらもようやくと安心院の家に着いた。と、安心院は悠斗のほうに顔を向ける。悠斗は何かあるのかと視線を合わせようとしたその瞬間。

何か、柔らかいものが悠斗の頬に触れた。

悠斗がそれを確認する前にそれは離れてしまったが、安心院のほうを見てみると、赤い顔をしながらも悠斗にその顔は見られまいと玄

関に突っ走ってしまった。

「送ってくれてありがとう！じゃあね！」

背中を見せたまま早口でそう捲し立てると、安心院は自分の家に入っ
ていってしまった。

悠斗は呆然と触れた頬を無意識に撫でる。微かだが、温もりが残っ
ていた。

ふう、と一息ついて心を落ち着かせる。大丈夫、頬だからまだファ
ーストキスは奪われてない。大丈夫だ。

とまあ自分にそう言い聞かせながら、悠斗は安心院にもあんな一面
があるんだなあと考えながら帰路を急いだ。

と、帰路を急ぐ悠斗の前に何かがある。それは小さな子供のよう
な人影だ。白に近い水色の髪の毛、小柄な体格、赤いネックウオー
マ！。

悠斗はその人物に見覚えがあった。その人影の能力に触れないよう
に、電磁波を一切漏れ出さないようにベクトルを操作する。そして
悠斗はその人物の傍まで行って、見下ろす。

微かに意識はあるようだ。だがこのまま放置すれば命に危険が及ぶかもしれない。

そう考えた悠斗は手を掴んで自分の背に乗せてやる。思ったよりも体重は軽く、そして冷たかった。

早く手当てをする為に帰路を急ぐ悠斗。その背に乗っている者の手は、しっかりと悠斗の制服を掴んでいた。

第十一条・親と子（前書き）

中々話が前に進まない・・・；

第十一条・親と子

雨に濡れたせいで冷たくなった子を背負う。背中から雨水が染み込んできてヒンヤリしてきた。

片手で傘を持ち、もう片方の手を背負った子の下に潜り込ませて支えてやる。鞆は落ちないように強く脇で挟んだ。

相も変わらず悠斗の制服をギュツと掴んで離さない。やれやれ、寝かせるときに苦勞しそうだ、と溜め息を軽く吐いて歩を進める。

見慣れた街並み。しかし、天気が雨だからか、歩道には昨日までの活気が見当たらない。ちらほらと傘を差している大人の間をすり抜けるようにして、悠斗は自分の家に帰宅した。

「ただいま。」

といっても返事はない。悠斗の母である玲は仕事に行っているからだ。帰ってくるのは遅くて夜中。早くて夕方頃。いつも帰ってくるのが不定期なのだ。

畳んだ傘の水気を切って傘立てに突っ込む。鞆を玄関の隅に放り投げて、悠斗は拾った子を背負いながら風呂場に向かった。だが、目

的は風呂ではない。

近くにある棚からバスタオルを何枚か取り出す。四苦八苦して制服から手を外させると、服の上からバスタオルで拭いてやる。相当に服が水を含んでいたらしく、直に一枚目のバスタオルがビチャビチャになってしまった。

流しで水を切って洗濯機に放り込んで、二枚目のバスタオルでまた拭いてやる。何回かそれを繰り返すと、水気もだんだん無くなってきた。

壁に背を預けさせて、自室に向かう。箆笥の中から暖かそうな服を適当に見繕って、また風呂場に戻った。と、ここで一つ問題が発生する。

というのも、これは悠斗が体を拭いてあげているときに気づいたものののだが、実はこの子。

「女の子、なんだよなあ……。」

ガリガリと風呂場に向かいながらどうしたものかと息を吐く。そう、拾った子は女の子だったのだ。外見が中性的で体の起伏も無かった為、てっきり男の子かと思っていたのだが。

拭いているときに気づいた違和感。それを悠斗は敏感に感じ取っていた。いくら状況が状況とはいえ、思春期のオトコノコが、無防備なオンナノコを脱がせるわけにはいかない。良心的な意味で。

かといってそのままにしておいたら、確実に症状は悪化する。水気は無くなってきたとはいえ、完全には拭き取れていない。その拭き取れない水が、容赦なく少女の体温を奪っていく。

やはり覚悟を決めるしかないのか、そしてこの子が起きた時に土下座で誤るしかないのか。と、途方にくれていた悠斗の耳に。

「たっだいまー！」

救世主^{メシア}、降臨。

ダツと玄関までダツシュ。見えるのは見慣れた母の顔。玲は悠斗を見ると、にへら〜と顔を蕩けさせる。

そして何かを言おうとするが、

「お帰り母さん疲れてるところ悪いけどちょっと頼みたいことがあるんだ帰ってくる途中にちよつと女の子を拾っちゃって俺じゃ着替えさせられないからちよつと母さんが着替えさせてくれないかな俺はおかゆか何かを作るからさ後女の子は風呂場にいるからこれ俺の

「ただど着替えに使ってねよろしく！」

早口にそう捲し立てると、玲が手に持っていた鞆を引つ手繰る様にして預かり、代わりに着させようとしていた服を押し付けて悠斗はキッチンのほうにサッサと行ってしまった。

残された玲はポカーンと呆けていたが、とりあえず靴を脱いで悠斗に言われた通り、風呂場に向かった……。手渡された悠斗の服に顔を埋めながら。

「あー……。ゆーちゃんの匂いが……。よし、これで一週間は戦える……。。」

深呼吸をするように大きく息を吸ったり吐いたりしながら、玲は風呂場にいた少女に服を着せ替えた。着せ替えるとき、少しションボリしていたのはこの際余談である。

ぞわり、と少女のためにお粥を作っている悠斗の背中に悪寒が走った。どうしたんだろうと首を捻りながら、視線を鍋に戻す。同時刻、玲が性懲りも無く悠斗の服の匂いを嗅いでいたことを彼は知らない。

ゆつくりとこげないようにかき混ぜながらコトコトと煮ていると、玲が着替えを終わらせたらしく、キッチンにやってきた。

「ゆーちゃん。着替え終わったけど、この子、どこに寝かせるの？」

「んー。俺が拾ってきたんだし、俺のベッドに寝かせておいて。」

「ん、わかった。じゃあ私のベッドに寝かせておくね。」

あら？と思うず玲のほうを見ると、既に自室の扉を開けて部屋に入るところだった。声をかける暇も無く、部屋に入っていつてしまった。話、伝わってたか？と鍋をかき混ぜる手を休めることなく頭に疑問符を浮かべる悠斗であった。

ま、母さんがいいならそれでいいか。と自己完結すると、一旦鍋の火を止めて蓋を被せる。清潔な手拭いと水を張った桶を玲の自室に

持つていく。丁度寝かせて掛け布団を整えていた所で、悠斗はそれが終わるのを見計らって、水に濡らした手拭いを額に乗せた。

未だ荒い呼吸をしているが、これ以上悪化するのとは防ぐ事ができた。近くに玲が持つてきてくれた水差しとコップを置いて二人は今に移動した。

どちらが言つまでも無く、テーブルを挟むように座る。少しの沈黙の後、玲が切り出した。

「ゆーちゃん。あの子、どうしたの？」

「言つたら、帰り途中にヤバそうだったから拾つてきたつて。」

「拾つてきたつて・・・動物じゃあるまいし・・・。」

「通りには誰もいなかったし、傘も差さずに水溜まりにぶつ倒れてたんだ。見捨てるわけにも行かなかったから。」

ビックリさせてゴメン、と申し訳なさそうに謝る悠斗に、玲はパタと手を振って苦笑した。

「大丈夫よ。ゆーちゃんは優しいもんねえ．．．私も同じ立場だったらそうする。」

玲がそう言うと、悠斗はフツと微笑んだ。その微笑みは嬉しそうで、だがそれと共に、どこか儚げで寂しげな笑みだった。

台所から持ってきたコップの中の水で喉を潤す。トンツと軽い音を立てて置かれたコップを悠斗は手で弄びながら、口を開いた。

「母さんに似たのかな．．．俺を拾ってきたぐらいだもんなあ．．．」

『拾ってきた』その単語を聞いた玲は、その場に固まった。喉が一瞬にして干上がる。辛うじてその理由を求める言葉を搾り出した。

「な．．．んで．．．その．．．事．．．」

「小さい頃の記憶．．．っていうのは中々に憶えているものだから．．．まして、それが一生モノの記憶だったら尚更、ね。」

グラスを弄ぶ手を止め。だけど、と悠斗は続けた。

「別にその事を恨んでいる訳じゃあ無いよ。ただ、母さんが隠してきた事を無くそうとしてるだけさ。」

「……………え？」

「母さんが一方的に俺に対して隠そうとしている……それが母さんへの重荷になると思うんだ。いつ俺に対して拾い子だって言うタイミングを計っているのかっていうのがね。俺はそれを無くしてあげたいだけなんだ。俺の、たった一人の『お母さん』なんだから。」

「あ……………う……………」

困ったように笑う悠斗。玲の視界が、だんだん歪んできた。そして頬を伝う涙。

悠斗は何も言わず自分の母親の元に歩みより、その体を抱きしめた。玲は悠斗のその行動に、終にしゃくりまであげて子供のように悠斗を抱き返した。

「ゴメンね……………ゴメンね……………」

うわ言のようにそう呟く玲をもっと力強く抱きしめて、悠斗は子供をあやす様に玲の背中をさすり続けた。とても優しく、ゆっくりと。

外の雨は、
いつの間にか止んでいた。

第十二条・溶ける氷の心

「……ねえ、まだ？」

「んゝ……まだあゝ。」

先ほどまでとは打って変わってうんざりしたような顔つきの悠斗に蕩けたような玲。抱きついたままグリグリと悠斗の首筋に顔を擦りつけてさらに惚けた顔になるという玲の無限ループに悠斗は溜息を吐く。

「……ええい！うっとおしい！」

「わ！？」

ついに振り解く気になった悠斗は玲の脇の下に手を入れて強引に自分から引き離した。残念、といった玲の文句を無視して少し冷めてしまったお粥を再度温める為にキッチンに向かう。

玲はというと、ちゃっかり悠斗の後をつけてキッチンに入っていた。そのまま今度は背中に抱きつく。今度は振り解いてこないことをいいことに顎を悠斗の肩に乗せる。

もはや溜息すら出なくなった悠斗は何も言わずにとろ火でゆっくり温めていく。

そうして程よい温度になったところで火を止めて器に盛る。お盆に薬とお粥を乗せて寝ている少女の下に持っていく、ついでにずるずる引きずられる玲をソファーに放るのを忘れずに。

「お、起きてたか。」

少女が目を覚ましてから数分。目の前にお盆を持った少年が現れた。上下スウェットというラフな格好で部屋に入ると少女の近くにあった机にお盆を置く。

少女が目を覚まして最初に入った光景は見知らぬ天井だった。いや、ネタではなく。

そうして少しの間脳が覚醒するまで天井を見続けた後、ムクリと体を起こした。が、頭が少し痛いし、体も何か気だるい。体を支えきれずにベットにもたれ掛かった。

まだ少しぼやける視界で部屋の中を見渡す。簡素というか、質素というか、どうにか女性の部屋だということがわかる程度の部屋だった。

そして自分の体を見てみると服が変わっている。どうやらこの部屋の主が着せ替えたらしい。そして傍らには水とコップ。起きたら飲み、ということだろうか。

そしてそこまで考えを張り巡らせた時に彼は来た。

お盆を机に置くと、近くの椅子に腰掛けて話しかけてきた。

「気分はどうだ？」

「・・・・・・・・・・。」

答えない。少年は答えない少女に少し困った顔を向けた。が、それは少女も同じことだった。

自分の異常が発動していない。いや、発動はしている、が、少年に対しては何故か通用していないのだ。

故に警戒して口を開かなかった。

「まあいいや。じゃあちよつと熱測つて。」

「・・・・・・・・・・。」

手渡された体温計を黙って受け取り脇の下に挟みこんで熱を計る。その間にもどうにか少年の心、正確には電磁波を受信しようと試みるが一向に読み取れない。

そうしている間に熱を計り終えたらしく、電子音が鳴った。自分で見てから少年に見せる。

「38.5・・・少し高いな。ほら、お粥だ。」

「・・・・・・・・・・。」

手渡された器を貰って膝に置くと、少年に向かってついに口を開いた。

「ねえ、君は誰？」

「あ、自己紹介してなかったな。俺は十六夜悠斗、この家で母さんと二人暮らししてる。」

「お母さんと・・・・・・・・。」

「おう、ついでにここは母さんの部屋だ。」

なるほど、そうだったのか。この部屋が母親の部屋だというのは納得はできる。ついでに服は？と聞くと俺の服だ、と答えられた。

とりあえず渡されたお粥を冷めないうちに胃の中に入れる。せつかくの好意を無駄にするわけにもいかない。

自分でも驚くぐらいの速さでお粥を平らげると今度は薬を飲む。そうして一息ついたところで今度は悠斗の方から切り出してきた。

「それで、俺は自己紹介した。今度は君の番だ。」

「僕は……未造。行橋未造。」

「未造……ね。まああんな所でぶっ倒れてた事については聞かないで置こう。何か有りそうだし。」

実際には何もないのだが、本題に入るには丁度いいためあえてそれについては何も言わずに本題を切り出した。

「ねえ、君何かしてる？」

「へ？」

「僕の異常が君に対して効果を発揮してない。」

そついうと悠斗はああ、と納得したような表情になり、

「そりゃ俺が自分の規格外チカラを使ってるからな。」

「君の・・・チカラ？」

おつよ、と頷く悠斗。ありえない、と未造は思った。何せ自分の異^の常性は『電磁波を受信する』という能力だからだ。

人が生きていくうえで電磁波を外に漏れ出さないことなんて不可能だ。それこそ電磁波の方向を変えない限りは絶対に不可能だ。

「まあ俺の能力なんざどうでもいい。とりあえず家の人に連絡しなきゃな。家の電話番号とかわかるか？」

「・・・分かる、けど。」

「けど？」

「電話しても絶対に出ないよ。だって二人とも海外だもん。」

そつだ、未造の両親は海外へ出張に出かけたのだ。未造一人を残して。

生活に困らないだけの金は貰った。だが、そうではないのだ。未造

は何より繋がりを求めた。両親、親戚、友達、恋人、なんでもよかった。ただ、誰かと繋がって安心したかったのだ。だが、それは叶わぬ夢。

何せその全てを自分の異常性^{チカラ}が壊してしまったからだ。繋がりを求めようとするたび相手の思考が頭に流れ込んできて、その心の醜さを曝け出された。

その繰り返し。繰り返し。そして彼女は繋がりを求めることを諦めた。人は醜いことが分かってしまったからだ。

現に悠斗のこととも今も疑っている。思考は読めないが、今までの話が嘘だということもありえる。そうして自分を騙してこの身を犯すつもりなのかすら頭の中に出てきている。

そう疑っていると、悠斗はそうか、悪い。と謝った。

「とりあえず熱が下がるまで寝てろ。」

そついい残して部屋から出て行ってしまった。出て行った扉を少しぼおっとしながら眺めて、またベッドに倒れ伏した。

十数分経ったころだろうか、急にドアが開いた。また悠斗だろうか、

と目を向けると、入ってきたのは金髪の美女。どうやら彼女が悠斗の母親らしい。

「あ、どうも。」

人懐っこい性格らしく、ニコニコと笑みを浮かべて未造に近づいてきた。未造は拒絶しない。

そのまま悠斗が座っていた椅子に腰掛けると話題を振ってきた。

「お名前はなんていうの？」

「……行橋未造。」

「おお、みーちゃんっていうのか。私は悠斗の母親の玲、よろしくね!」

屈託のない笑みで手を差し出してくる。じっとその手を見つめた未造は、その手を握った。

そこで初めて気がついた。

この女、醜い部分がない。

否、あるにはあるのだが、それはとても小さなもので、少なくとも未造に対して下心などを抱いてはいないことが分かったのだ。だから未造は素直に従った。

その後もキャツキヤと未造に仲良さ気に話しかけてくる玲に未造はクールに対応をしていたが、玲の心の温かさにあてられたのか、未造の心も温かくなっていった。

そこで初めて未造は、玲を、悠斗の母親を信じてみよう、と思ったのだった。

「それでね、ゆーちゃんがさっき――」

悠斗が優しいことはわかったから、話す話全て悠斗のことというのは勘弁してほしいかった未造だった。

第十三条・報告（前書き）

どうしてこうなった・・・

今回力オス回、少し性描写？みたいなの入ってます。かなり薄いモノですが、苦手な方はすぐさまバックステッポウしてください。あ、あとがきもご覧ください。

とどころおかしい？気にするな！（魔王的な感じで）

第十三条・報告

「へつくしよい！」

中々オッサン臭いクシャミが部屋に響く。もう何箱目か分からなくなったティッシュ箱からティッシュを取り出して鼻をかむ。それが最後のティッシュだったのか、空き箱になったティッシュ箱を鼻をかんだティッシュと共にゴミ箱に沈めた。

頭がボーっとする。虚ろな目で天井をみている悠斗は絶賛療養中である。

何故か。それは一昨日連れてきた未造に風邪を移されたというまったくもって自業自得な理由である。

体を動かすのも億劫なぐらいにだるい。脇に挟んだ体温計の計測が終わる電子音が聞こえたのでそれをどうにか取り出して見てみると体温は39。

ケースの中に入れてクッションに向かってペイツと投げて布団を首まで持っていく。と、ドアが開いた。

「熱、計った？」

ヒヨイと部屋に入ってきたのは悠斗に風邪を移した原因である行橋未造だった。また風邪にならないようにしっかりとマスクをしてベッド近くの椅子に座る。

「39 だつてよ。」

「39 ? もうインフルエンザじゃないのそれ? . . . ってうわあ、もうタオルがぬるくなってる。」

悠斗の額に乗せられている濡れタオルを手にとると、タオルがぬるい。先程変えたばかりだというのに。

冷たい水を張った洗面器に浸けてあるタオルを乗せられていたタオルと交換する。冷たいタオルを乗せると悠斗が少し身じろぎをした。

「あー . . . 冷てえ . . . 。」

「薬は飲んだよね。タオルも交換した。汗もあんまり掻いてないし . . . 大丈夫かな。後はちゃんと寝てなきゃ駄目だよ。」

「りょーかい . . . 。」

息を大きく吐くと、そのまま悠斗は目を閉じた。言われたとおり寝るつもりなのだろう。

未造はようやくと落ち着いたと安堵した。まさか自分の恩人に風邪を移すなんて思ってもいなかった。だから未造は自分からこの世話やくを引き受けた。

本当は母親である玲がすべきことなのだろうが、生憎と仕事の上休めなかったのだ。泣く泣く悠斗の世話を未造に任せただのだ。

『ゆーちゃんの事よろしく頼むね。私もできるだけ仕事を速く終わらせるからそれまで宜しく！それとゆーちゃんの初めては私のものだからね！奪うなんて真似しないでね？』

それだけ言い残すと、猛スピードで自身の仕事場に直行していった。舞い上がった土煙に咽る。土煙が晴れるとそこには誰もいなかった。ことを未造は良く覚えていてる。

度を越した親馬鹿だなあと思うと同時に、最後に言い渡された言葉を思い出し顔を赤くする。

幸か不幸か、悠斗は寝ているため、自分の赤くなった顔を見るもの

は誰もいなかった。初心な未造には衝撃的な玲の発言が頭の中を駆け巡る。

「（は、初めてって・・・あれじゃないよね・・・？いや、でも玲さんなら・・・。）」

あの親馬鹿へんたいならやりかねない。いや、冗談ではなく本当に。

未造は一回見ているのだ。玲が悠斗の部屋のベッドに倒れこみ、ハアア言いながら手を股の間に挟んでモゾモゾ動かしていたのを。

何故そこまで彼は人を引き付けるのだろうか。確か2つ下の幼馴染がいるとか何とか言っていたような気がする。しかも女の子。

そこまで考え、気づいた。僕はいつたいつ時から彼の顔を覗いていた？

既に夢の中に入り込んでいる悠斗の寝顔は穏やかだ。胸の辺りが規則正しく上下している。

と、玲の言葉がまた思い出され、余計に意識してしまう。いつもだつたら気にしないほどの仕草さえ、彼女の心を揺さぶる。

「（うう……これも玲さんの所為だよ……）」

火照った顔をどうにか冷やそうと冷水に浸ってあったタオルを顔に当てる、が、冷やされたのは、悠斗の額に当ててあったタオルだと気づくまでの間だけだった。

余計火照った顔でまた悠斗を見る。

よくよく見ると顔は整っているし、性格もこの三日間で大体は把握している。

だからこそ、惚れた。惚れ込んだ。別に助けられたなどというつもり橋効果ではない。単純に、一目惚れだ。好きなのだ。

だから、これはチャンスではないか？

病気である好きな男の子の看病↓「ありがとう、案外優しいところもあるんだな。」↓「お、俺・・・実はお前の事が・・・！」↓「チュツ」↓彼氏が出来る

病気である好きな男の子の看病しない↓「あーあの時は辛かったなあ」↓「そうそう、あの時アイツがさ・・・」↓「言ってなかったっけ？俺アイツと付き合ってるんだ」↓いくえ不明

よし！

良く分かん思考回路で大きな決断をした未造は、悠斗の寝ているベッドに乗ると悠斗の体に馬乗りになる。

そしてそのまま紅の顔を近づけて、悠斗の唇を奪おうとする。何かウンウン唸っているが、未造は気にしない。

そして、二人の顔は一つになった。

「寝たはずなのに急に教室にいるという表情になる。悠斗は深い悲しみに包まれた。」

「いきなり何を言い出すんだい、君は。」

呆れた表情で悠斗を見ってくる安心院。後ろの棚に座っている。服装はいつも見えている通りの制服姿。悠斗も気づくと制服姿になっていた

た。

「まーたお前の『^{アフノーマル}異常性』か。今度は何だ？『^{デモンオブジェクト}昏睡礼賛』か？それとも『^{ナイトメア}忘れられた劇場』か？どっちにしる俺は風邪引いてるんだ、さっさと休ませてくれ。」

「まあまあ、今日はちよつとした報告があつてね。」

いつもどおりニコニコしながら悠斗に近づく。悠斗の近くの机にまた腰を乗せると、何でもない様な声色で。

「今日、球磨川ちゃんに顔を剥がされたんだよね。」

「へー。」

とこちらもどうでもよさげな反応。安心院はその反応に少しムスツとした。手を伸ばして悠斗の頬つぺたをムニムニ引っ張る。

「何その反応。ちょっと僕の乙女心が傷ついたんだけど。」

「別にお前怪我したって、『メタモルフォーゼ減転回帰』使えば怪我なんてあつという間に『直す』じゃねーか。」

「アレは怪我を『直す』ためにある訳じゃないけどね。アレは『変化したもの』を元に戻す『能力』だよ。使い方少し間違ってる。」

「結果が同じなら全て同じだ。・・・で、報告はそれで終わりか。見た限りじゃ怪我なんてないし、さっさと俺を帰せ。」

「ところがぎつちゃん、まだ報告は終わってないんだよね。」

ああ？と怪訝な表情になる悠斗。安心院はテヘヘ、と困ったような笑顔で。

「顔剥がされたときに球磨川ちゃんの『オールフィクション大嘘憑き』と『ブックメーカー却本作り』で封印されちゃってさ。肉体が世界ソートに出れなくなっちゃった。」

テヘペロ♪

「さーで、出口は何処かなー。ここかなー。」

「やー、無視するとはいいい度胸じゃないか。ちゃんと人の話は聞けつて。」

ドアに向かおうとした悠斗を引き止める安心院。その引止めすら意に介さず悠斗はズリズリと前に進もうとする。

「バツカおめー、どうせ（俺にとって）碌でもない話なんだろ。聞く意味無ーし。」

「いやぁそれはどうか。僕が悠斗の夢の中に毎晩現れるっていうまさに夢のような話だぜ？」

「いいいいやあああああ！おうちかえるうううう！」

ジタバタ暴れる悠斗を安心院は地面に張り倒す。仰向けにさせて、馬乗りになった。もかく悠斗の顔を、優しく、色っぽく、艶かしく撫でる。ハアと熱の籠った吐息が悠斗の顔に当たった。

「現実世界じゃ君はいつも女の子に囲まれてたけど、夢の世界では僕が君を独り占め・・・フフフ・・・。」

何か怖い、何か恐い。

「いや、恐いつて。っーか頼むから俺を休ませてくれ。風邪が治ったらいくらでも相手してやるから！お願いだから！悠斗さん一生のお願い！」

「・・・まあいつか。時間はたっぷりあるからね。今日はこのへんにしておこうか。さて、治ったときが楽しみだよ・・・フフフフ・・・。」

不意に体の重みが消える。そして、意識が反転した。

パチ バツ ゴチン！

「いつてええええええ！？」

「いったあああああ！？」

目を開き、ベッドから思い切り起き上がると、そこは未造の額でした。という衝撃的な目覚めを経験した悠斗は、とりあえずぶつかった衝撃で落つこちた未造から話を聞くことにした。

「おい、何でお前は俺の上に乗ってたんだ。しかも顔近づけて。」

「ふえ！？いいいや何でも無いですよ？だから以下レスひ不要です。」

いきなり突撃してきた玲にベッドに押し倒された。そのまま首筋に顔を埋めて悦んでいる。どうにか引き離そうとするが、脅威のパワーで悠斗を？んで離さない。いよいよベクトル操作で離れさせようとする、が、何故か能力が発現しない。

「ジョーク！何で能力が使えないんだよ！？」

「うううううう！私の想いよーちゃんに届け！はああああああああ！」

「未造おおおおお！俺を助けるおおおおお！」

だが、未造は赤くなつたまま口をパクパクさせていて使い物にならない。どうやらさつきしようとしたことを話しているのだろぅが、聞こえないし、優先順位が一氣に入れ替わつたのでそれよりも助けてほしいと思つてゐる悠斗。

「うおおおおお！……うおおおおあ
あああ！！ゆーちゃあああん！あいして
るうつうつうつ」

君に夢中だあああ！！」

「ぎゃあ ああああああああ！！」

第十三条・報告（後書き）

何か文がおかしいところがありますが、仕様です。詳しくはブロン
ト語録で！

第十四条・面接

「箱庭学園って、けっこうデカイなあ。」

「そうだね。えーっと・・・県内有数のマンモス高らしいよ。創立100年で、1学年に付き13クラスまであるらしいね。クラブとか部活も30個以上もあるんだってさ。」

悠斗の横に立ち、入る前に事前準備として手に入れたパンフレットを見ながら未造は説明する。

現在、悠斗がいるのは箱庭学園という高校。県内有数のマンモス高校である。だが、何故悠斗達はこの学園に来ているのだろうか。

「それにしても、面接なんて緊張するな。」

「そだね。ここでいい印象残して、この高校に入りたいね。」

今の悠斗達は中学三年生。箱庭学園に入るため、面接を受けに来たのだ。いわゆる推薦入試という奴である。

辺りを見回してみると、自分達と同じように面接を受けに来たのか、

ちらほらと見慣れない制服姿の少年少女達の姿が確認できる。もちろん、その中には異様な雰囲気をかもし出している者もだ。

「うわぁ、何あの制服・・・なのかな？すごい改造してる。」

「あーいう連中とはぜひとも関わりたく無いな。」

そんな他の受験生を見ながら進もうとすると、ドン、と誰かにぶつかった。

「あ、スンマセン。」

「ん？ああ、大丈夫だ。気にするな。」

たぶん悠斗達と同じ受験生なのだろう、意外にも背は高い。たぶん190cmはあるだろう身長に、悠斗は思わず、

「でっけえ！」

「ハハッ、自覚はしてるさ。見たところあんたもこの学校を受験しに来たらしいな、まあお互い上手くやろうや。もしどっちも受かったなら、学校じゃよろしく頼むぜ。」

意外に気さくな人物だった。じゃーなーと手を振りながら人混みに紛れる・・・といってもその巨漢のせいで紛れ込めてない気がするが。

と思ったのも束の間、その巨漢の少年は不意に悠斗の視界から消えうせた。しかも、何の違和感も抱かせずに、だ。

それと同時。

「ん、アレ。俺何してたんだ？」

「んーわかんない。まあ兎に角試験会場に行こう、そろそろ開始時刻だよ。」

「本当だ、じゃあさっさと行こうか。」

ついさっきまで話していた相手の事を忘れさせられた悠斗達は、何の疑問も抱かず、何の違和感も感じず、何の不安も持つことなく受験会場に歩を進める。

これが、97代箱庭学園生徒会長日之影空洞、通称『知られざる英
ウシ ミスターアン』

雄』との初の接触だということにすら気づく事無く。

「（っべーまじっべー何この緊張感、っべーよ。）」

内心でそうボケている・・・というより無理やり平静を保とうとしている悠斗。何故悠斗がそこまで追い込まれているのか、その答えは悠斗が対峙している人物にあった。

「どうかしましたか。ほら、面接だからといって緊張しないでください。」

コトン、と湯飲みを置いたその人物こそ箱庭学園理事長である不知火袴その人だからしょうがないといえましょうがないのだろうか。

常に微笑を絶やさず、それでいて纏う空気は全てを見抜くような。

そんな雰囲気の中緊張するなというほうが無理があろう。

「それでは始めましょうか。．．．確かあなたは特待生になることを希望していましたね？」

「は、はい。確かにそうです。」

「何故特待生になることを希望したんですか？」

「あ、その．．．家は母と私一人だけでして．．．それで母の負担を減らすために、せめて授業料などは免除してもらえる特待生になりたいと思ったからです。」

「ほう．．．若いのに素晴らしい志を持っていますね．．．。」

「は、はあ。ありがとうございます．．．。」

理事長に褒められ、少し照れる悠斗。その姿にまた微笑を深める袴。そしていくつか質問を重ね、袴が取り出したのは。

「では十六夜さん。ここで一つ老人の実験に付き合ってもらえませんか？」

ワイングラスに入った、大量のサイコロだった。

目の前にいる少年。一見すると唯の少年だ。だが、纏う雰囲気こそれを否定させる。そう、箱庭学園理事長不知火袴は判断した。

だからこそ、このサイコロはんだんざいりょうを出した。これで完全に見抜く。

特待生に相応しいか。そしてフラスコ計画もくてきに必要なかどうかを。

「は、はあ。」

「何、そんなに難しいことはありません。唯単にこのサイコロをまとめて振るだけです。さあどうぞ。」

「分かりました……。」

わけが分からないような顔をしつつ、目の前の少年――十
六夜悠斗はサイコロを振った。そして出た出目は。

「……ふむ。」

全てバラバラの出目。まるで規則性も無く、何の変哲もない出目。
異常なんて無く、普通の結果。

では、この少年は異常ではないのか？ いや、しかし纏う雰囲気は普
通ではない。勿論特別でもない。そして異常すらない。この奇妙な
感覚は何なのか。

その後も何度かサイコロは振らせたが、まるで規則性もなく、唯振
ただけの単純な結果に終わった。

私の目がまちがっていたのでしょうか……。と心中ため息を吐き、
せめて特別科には入れてあげようと判断したその時、悠斗の後ろ・
……正確には悠斗の後ろにある窓に映った黒い点。

それが野球ボールだと気づき、警告を発した時にはもう遅い。その

野球ボールは猛スピードで窓ガラスを突き破り、そして悠斗に直撃。

そしてそのボールは入ってきたそのままの軌道を描いて外に飛び出していった。

「え．．．．？」

「あー危なかった。理事長、警告どうもありがとうございました。お陰で助かりましたよ。」

「あ、いや、どういたしまして．．．じゃなくて！大丈夫なんですか！？怪我は？どこか痛むところとかないですか！？」

「そんな心配しなくても大丈夫ですよ。ほらこのとおり。ピンピンしてますよ。」

笑いながら何も異常がないことをアピールする悠斗。いや、異常がない？違う、異常だらけだ。

何故彼は怪我一つ負ってないのだ？どうやって彼は自分を守った？何故ボールがそのまま入ってきた軌道をなぞるようにして戻っていったのか？

そして口調に違和感を感じる。何がおかしいかとは具体的にいえないが、どこかが可笑しいのだ。

悠斗は自分の心の中の疑問を見抜いたように、苦笑を浮かべながら

口を開いた。

「ああ、この口調はあんまり気にしないでください。どオも能力を使つと勝手になつちゃうんですよ。」

「能……力……?」

「はい。でも大した能力じゃ無いんで、気にしないでください。」

ヒラヒラと笑いながら話す彼。その少年が話す『能力』。もしかしたら、ノーマル普通でもなく、スペシャル特別でもなく、アブノーマル異常でもない。まったく新しい能力。チカラ

その能力がチカラあれば、もくてきフラスコ計画に大きく一步を踏み出せるかもしれない。

だからこそ、逃がしはしない。逃がさない。絶対に捕らえる。

「では、その能力がどんなものか教えてもらえませんか?」

「ええ……いや、でもあんまり説明したくないんですね……。」

「

口調が元に戻っている、ということは能力を解除したということか。だが、外見はなんら変わったところはない。

「ではこうしましょう。始め私は貴方を特別科に入れようと思っていました。ですが、悠斗君の能力を説明してくれるのなら、悠斗君を13組に入れましょう。」

「え……。」

確実に心が揺れ動いた。多分、崩れるのも時間の問題だろう。だからこそ、踏み出させるためにももう一押し加える。

「貴方の親御さんに負担をかけないようにできるんですよ？13組に入ったなら、特別科より多くの免除が施されます。さあ、どうしますか？」

彼が辿る道など、一つしかない。

悠斗が出て行った理事長室。不知火袴は一人温くなったお茶を啜りながら悠斗の能力について思い出していた。

「『あらゆるベクトルを操る』……ですか……。」

彼の話によれば、使い方次第では国一つと戦えるほどの力らしい。それもそうだ、外側からのあらゆる攻撃は全て悠斗に届くことを許されず、一方的に相手を圧倒できるのだから。

恐ろしい能力だ。だが、それは逆に言えばチャンスだ。

「面白い、面白いですよ十六夜悠斗君……！これで君が加わればフラスコ計画は新しい一步を踏み出すことができる……！」

フラスコ計画。天才を安価に。そして大量生産するために理事長自身を考え出した狂気の計画。その為に、彼——十六夜悠斗がどうしても欲しい！

他にも計画に欠かせない重要な人物はいるが、悠斗が加われれば完璧になるだろう。だからこそ、13組に入れたのだ。

後はどうにかして彼をフラスコ計画に引きずり込むか。

入ってくれるだろうか、この計画に。いや、多分入らないだろう。だからこそ、手を打つ。

もてる限りのカードを使って、是が非でも彼を計画の主柱にする。

「ふっふっふ……逃がしませんよ、悠斗君。」

一人袴は計画が成功することを想像し、ニヤリと笑った。

「お、未造。どうだった？」

「あ、悠斗。バッチリだったよ！悠斗はどうだった？」

「俺？なんか部屋が足りないと言われてさ、理事長室で理事長と面接した。」

「ホントに！？凄いなあ。ねえ理事長ってどんな感じだった？」

「んー、優しいおじさん、見たいな感じだったなあ。接した限りはそう感じたけど・・・。」

「けど？」

「何か胡散臭いっていうか、怖いって言うか。本質を完全に隠してる感じだったな。」

「へえー。ま、終わったことを回想しても仕方ないよ。そろそろ帰る？」

「そうだな。じゃ、帰るかー。」

「うん！」

第十五条・入学

馬鹿でかく、呆れるほど広大な敷地を誇る箱庭学園。その学園の制服を身に着けて、悠斗と未造は門をくぐり抜けた。

あらゆるスポーツや芸術などの施設が建てられているのを見ながら下駄箱前に張り出されている紙に近づく。

どうやらクラス編成の紙のようであり、周りに新入生らしき生徒達が群がっている。悠斗達も自分達のクラスが何組であるかを確認する。

「ねえ、ここから見える？」

「微妙。もうちょい近づけば分かると思う。」

「それにしても、結構な人数が見に来てるね。」

「マンモス学校だからじゃないか？こんなだっ広い敷地持つてて入ってくるのは極僅か、っていうのはありえないし。」

と、各々自分がどのクラスか把握したのか、集まっていた新入生

達は紙の前から去っていく。

ここがチャンス、とばかりに悠斗は未造を背中に乗つけて紙の前に移動する。こうでもしないと身長の高い未造が紙を見れないからだ。

紙の前に移動した悠斗と未造は一組から自分の名前がないか確認し始める。悠斗と未造の苗字は『い』と『ゆ』なので、探すのは容易である。

と、一組から順々に自分の名前を探していたのだが、無い。自分でもそこそこ頭は良い方だと自負していたので、精々十組辺りにでも入ってればいいなーと思っていたのだが、無い。

この箱庭学園、マンモス校と言われるだけあってクラス数も1学年に付き一組から十三組まである。そのため細かく区分けされている。

まず一組から四組は普通科、五・七・九組は体育科、六・八組は芸術科。それより上のクラスは全員が特待生となっており、十組は特別普通科、十一組は特別体育科、十二組は特別芸術科、さらに上には全国から集められた異常者で構成された十三組といったように分けられている。

取りあえず体育科、芸術科は最初から志望していないので論外。そうすると五・六・七・八・九・十一・十二組は除外される。ともす

れば一から四、もしくは十組に入っているはずなのだが、何回探しても自分の名前が無いのだ。

その内のどこのクラスにも無い、となると必然的に視線は一番右のほうに張り出されている紙の方に目がいく。

紙の一番上に書かれているクラス番号は十三組。他のクラスよりもう少し少ない人数の名前が書かれているその名簿の中に、悠斗と末造の名前はあった。

選りすぐり中の選りすぐり。エリート中のエリート。例外中の例外。人外中の人外。超常現象そのけの異能集団。登校義務ですら免除された、特別待遇にもほどがある究極の特待生クラス――

――箱庭学園十三組。

この学園で過ごす三年間。今の段階で波乱の匂いがしてきたのを悠斗は感じた。

「まーまー。超特別待遇のクラスに入れてよかったと思えばいいじゃん。」

「そう思えるほどお前よりポジティブじゃないからな。……あーあの時理事長に『十組でいい』って言ったんだけどなあ……。」

「そんなに十三組が嫌なの？」

「嫌って言うか、何と言うか。……アレだ、面倒くさそう。色が濃い奴等が集まってくるんだぞ？んで、そいつ等に絡まれるんだぞ？面倒くさいの他に何がある。」

少しクラス編成に不貞腐れながら、校舎内を歩いていく。

横で未造が苦笑する声を聞きながら、クラス編成の紙と共に張り出されてあった地図を頭の中で思い浮かべながらクラスに向かう。

色の濃い連中等との関わり合いに少し気だるさを覚えながら、そし

てその関わり合いに少し楽しみを覚えながら。

そしてついに宛がわれたクラスのドアの前に立った。

ふう、と一呼吸。どんな奴等がいるのかと少し期待しながら、ドアを開けた。そして見たのは。

誰もいない教室。

「は？」

思わずそう声が出てしまった。面倒くさいといってはいたが、少しは期待していたのにも関わらず教室には誰もいない。

教室に備え付けられた時計を見ればもうそろそろ集まるはずの時刻を差している。だが教室内には影も気配すらない。

と、悠斗の反応に異変を感じたのか、未造がヒョッコリとドアから教室内を見る。未造も誰もいないことに少し眉を潜めたが、

「悠斗、誰がいるよ。」

「は？いや、今誰もいないんだぞ？」

「うつん、居るよ。ほら、あの真ん中の席。」

未造が指差す席は誰も座っていない席。はずなのに、何故かその席を意識すると感じるプレッシャー。未造は自身の『受信感度』で電磁波を受け取って存在を感じ取ったのだろう。その能力が無い悠斗にも分かる誰も居ないはずの席に座っている生徒。

取りあえず教室内に入り、その席に近づく。近づけば誰が座っているのか分かるかもしれないが、近づいたその瞬間。

「おー！なんだなんだ、面接ん時あった奴じゃねーか！久しぶりだなあオイ！」

不意に聞こえた声。突如現れたその巨軀。そして気さくに話しかけてくるその人物の顔。

ビクウ！と現れたことに驚く未造。だが、悠斗はまったく違った反応を見せていた。

その生徒の顔、巨軀、声。全てを脳の中に収め、そしてその記憶が戻ってくる。何故今の今まで忘れていたのか。

「あ、思い出した。アンタ、あの日俺がぶつかった奴か。」

「おう、思い出したか。俺の名前は日之影空洞。お互い面倒くさいクラスに入っちゃったなあ。」

「俺は十六夜悠斗。こっちは友達の行橋未造だ。まあそれなりに頑張っている。これからよろしく頼む。」

出された手を握って握手する。が、空洞の巨軀に比例しているその大きな手で悠斗の手をつかむと、悠斗の手を包み込んでしまいうだった。

「よ、よろしく。」

「おう、よろしくな。」

未造もその空洞の巨軀におどしながらも握手を交わす。その身長さが脇から見ていてかなりシユールだったが。

「しかし、何であるときの事忘れてたんだ？ 日之影みたいなデケエ奴なら記憶に残ってるはずなんだけどなあ……。」

「空洞でいいぞ、同じクラスの友達なんだからな。……まあ、それが俺がこのクラスに入れた理由だな。」

「ほう。その存在感の大きさが？」

「え、それって逆じゃないの？ 存在感が薄いから僕達に見えなかったんじゃないの？」

言う人によっては失礼に値する未造の発言にも空洞はハッハッハ、と笑って受け流した。

「お前は『受信感度』で居ることを悟ったんだろーが、俺は感じたぞ。めちゃくちゃな存在感をな。居ないはずなのに、すげえ存在感があっただよ。俺の言ってること矛盾してるだらうけどな。」

「言うなれば、俺の異常性は知られざる英雄って所か。うん、そうしよう。」

「嫌に厨二心を撥る名前だな。」

「いいんだよ、カッコいいじゃねーか。」

お互いどことなく笑いあう。会うのは二度目、しかも一度目はつい先程まで忘れていたにも関わらず、なのにもう二人の間の壁は取り払われていた。

「さて、俺の異常性は明かした。次は悠斗の異常性を明かす番だぜ。」

「あー…やっぱりそういう流れになるか……あんまり手の内晒したくないんだけど、理事長に晒した時点でもう意味無い、か。……いいよ、俺の能力は、っと。」

実演したほうが早いと感じたのか、悠斗は持参したバックの中から筆箱を取り出し、その中から消しゴムを取り出した。

悠斗の行動に不思議がっている空洞を尻目に、悠斗は手のひらを天井に向けて消しゴムをその上に乗せる。そして、

ポーン、と消しゴムは上に飛び跳ねた。

飛んだ消しゴムはそのまま天井にぶつかって落ちてくる。よつと、とその消しゴムを手を伸ばして捕まえた悠斗は呆然としている空洞に口を開いた。

「『あらゆる方向ベクトルを操作する』……これが俺の能力、一方通行アクセラレータだ。」

「……驚いた。今のどうやったんだ？」

「今のは消しゴムにかかった重力の方向を上の方に弄っただけだよ。そんな難しいことじゃない。」

何てことは無い、といった様子で消しゴムを筆箱の中に戻した。

「まあ応用は利くね。向かってくる物の方向を操作して反射したり、風を操って庭の掃除したり、熱いもの持っても熱を反射すればいいからな。」

「最初のはかなりエグイな。もしかしたらお前に攻撃が効かないと
かあり得るのか……にしても残りの二つの応用がしょぼい。もっと
効果的に使ってみたらどうだ。」

「日常に使えばそんなモンなんだよ。」

そーかい、と空洞が呆れると、今度は未造に話を振る。

そして未造が答える。

そうして3人は親睦を深めていった。

「んで、何時になったら先生来るんだ、それで俺達以外に生徒が居ないってどういうことだ。」

「登校義務が免除されてるから早速つかってるんだろ。後、教師が来ないのは黒板見れば分かる。」

「『永久自習』って書いてあるけど……。」

「……マジかよ。」

「大マジだ。」

十六条・変化

悠斗達が入学してから一週間。何のアクシデントも無く、平々凡々……というのは十三組になった時点で平凡とはかけ離れているのだが、それなりに楽しみながら学園生活を送っている。

といっても現在一年十三組の生徒でまともに登校しているのは悠斗と未造、それに空洞だけだ。他の生徒は出席義務免除をフルに使っているのだろう。

悠斗も未造も空洞も、登校をしなくてもいいのに登校をしている。それはお互いが友達として認識し、その友達たちと会うために登校しているからだ。

それだけの為に、その為に。

「……んで、このXの値を、このYの値に代入して……。」

「なるほどなるほど……。」

「悠斗せんせい頭痛が痛いので保健室に行ってきたでもいいですかー？」

「その言い訳38回目だぞ。数学が苦手だからって授業放棄は認めないからな、空洞。」

ぐへえと机に突っ伏す空洞に目もくれず、教壇に立っている悠斗は数学の教科書片手に黒板にチョークを走らせる。

未造はというと、悠斗の説明と黒板に書かれた説明をしつかりノートに書き写して授業を受けている。

それにしても何故悠斗が教壇に立って数学の勉強を未造と空洞に教えているのか。

それは三人で決めたことなのだ。十三組には基本的に教師は来ない。

それは登校義務が免除されているため、生徒が学校に来ないだろうという憶測と、十三組の生徒達に何を教えればいいのか分からないからだ。

だから十三組に教師は来ない。だから悠斗達はある決まりごとを作ったのだ。

それは『三人で教師をすること』だ。

数学の得意な悠斗が二人に数学を教える。国語と社会が得意だという空洞が国語と社会を二人に教える。英語と理科が得意な末造が英語と理科を二人に教える。

そういったローテーションを組んで三人はそれぞれ学力を伸ばす事を目標にした。

唯、悠斗だけが一教科担当なので、数学の時間は一日に二時間としている。空洞が絶望していたが。

と、調子よく説明を続けていると、教室に備え付けられているスピーカーからチャイムが流れた。

「よし、じゃあ今日はここまでにしよう。昼飯食いに行こうぜ。」

「おう。……さつてと、今日は何食おうかなー。」

「ボクはカレーにするよ。」

「じゃあ俺は日変わり定食にするか。」

ガチャン、とボタンを押すと下から学食の紙が出てくる。その紙には『日変わり定食』と書かれている。悠斗はその紙を学食のおばちゃんに渡し、定食を受け取った。

空洞も未造も先程言ったとおりの学食を受け取ると、端の方に移動して食べ始める。

「……やっぱり、慣れないな……。」

「あんまり気にしないほうがいいぞ。」

未造が食べながらそうつぶやいた。そのつぶやきは周りの視線から来るものだった。

十三組。あらゆる事柄に関して免除を受ける権利がある特待生。それは通常のクラスの生徒からしてみれば妬みと嫉妬を受ける対象にはもってこいだ。

その妬みと嫉妬の視線と共にあるのが、恐れ of 視線だった。

何をするのか分からない特待生。もしかしたら自分に火の粉が降りかかるかもしれない。何か免除という言葉を使って傍若無人な行動を起こすのではないか。

そんな恐怖からか、いつも三人の周りには誰も居なく、そして誰もが三人の行動に目を配っていた。

「ごちそうさん。」

「ごちそうさまでした。」

「ごちそうさま。」

それぞれの昼食を食べ終わり、食器をそのまま返すと三人は何事も無かったように食堂から出て行った。

その背中に数多の視線を受けながら。

「次何だっけ？」

「次は確か国語じゃなかったっけ。」

「お、俺の番か。ミツチリ教えてやろう。」

「オイ、俺の方を見て言うんじゃない。」

「しょうがないんじゃない？悠斗、他の教科は成績いいのに国語だけ悪いもん。」

「いや、他のは単語とか用語とか憶えればどうにかなるじゃんか。でも、国語は読み取りだから苦手なんだよ。」

中庭に来た三人はそう話しながら芝生の上に座る。次の授業まであと十数分、まだ時間に余裕がある。

中庭といってもここは広大な面積を持つ箱庭学園、普通の高校の中庭と比べると圧倒的な広さを持つのだ。だから他に誰か生徒が居てもおかしくはないのだが……。

「やっぱり誰も居ないね。」

「そうだな。……難しいな、人に好かれるのって。」

辺りを見回した未造の言葉に悠斗は思わず顔を顰める。やはり誰も居ない。まるで最初からそうであったかのように何の痕跡も残さず生徒が消えている。お前等は忍者かと。

「……十三組に入ったただけなんだがな。ここまで嫌われるといつそ清清しいぞ。」

空洞は足を胡坐の格好にし、困ったようにガシガシと頭を掻いた。悠斗は顔を若干緩め、溜息を吐いた。

「どうして俺達が嫌われてるのか、理由だけでも聞きたいんだがなあ……。」

「皆の反応見ると、ね。それもできなさそう。」

「せめて友達までとはいかなくても顔見知りぐらいな仲にはなりたいな。」

そう空洞が言葉を吐き出すと、三人一斉に大きな溜息を吐いた。と、ここで昼休み5分前の予鈴が鳴り響いた。

「おつと時間か。じゃあそろそろ戻ろう。」

悠斗が呼びかけると二人は相槌を打って立ち上がった。少し早めの足どりで教室に向かう途中、少し離れた校舎の屋上のほうから微かに話し声が聞こえてくる。

首を斜め上に動かしてよくよく見てみると、どうやら一年生が屋上ではしゃいでいるようだ。ギャーギャーいいながらどうやらじやれ合っているようだ。

楽しそうだなあ、とボンヤリ思いつつ歩を進めていく。が、その足はすぐさま地を離れることになる。

何故か。それは校舎の屋上から人が落ちてきたからである。

どうやらじゃれ合いがヒートアップしてしまい、周りの事が見えてなかったのか、柵を越えてそのまま落ちてきてしまったのだ。

そんな事情があるとは知らない悠斗は、人が落ちてきたという現象を把握した瞬間、右の足底で地面を思い切り蹴り飛ばす。その際にベクトル操作を行い、ロケット並みの爆発力を得る。恐るべきスピードで男子生徒の落下地点に向かった。

「間に合えエえええええええ！」

喉が枯れるほどの絶叫。

幸運にも落下地点と悠斗との距離はあまり離れてはいない。といっても初動が遅れたお陰で、落下地点に入るのはギリギリになるだろう。

でも何故、見知らぬ生徒を助けようと思ったのだろうか。そんな事を考える思考はあいにくと今の悠斗には持ち合わせてなかった。唯、今彼を救えるのは自分だけだと思ったただけだ。

『あらゆるベクトルを操作する』という化け物じみた能力を持っている悠斗だが、実際には万能ではない。

高速で移動はできるが、光速で移動はできない。怪我を負わせることはできるが、怪我を治すことはできない。自分を守ることは簡単だが、他人を守ることは難しい。

そして悠斗はその能力の全てを把握し、使用することはできない。

ゴッ！と風を切りながら悠斗は低空を駆ける。そして腕を前に伸ばし、今にも地面に激突しようとする男子生徒の体を掴んだ。

体を男子生徒の下に滑り込ませ抱え込み、激突の衝撃のベクトルを地面にそのまま流す。

ズズン！という轟音と共に、悠斗が倒れている地面が少し陥没した。だが、衝撃全てを地面に流したため、悠斗と男子生徒に怪我はない。地面には多大なダメージが与えられたが。

「つぶねエ、なんとか間に合ったか。」

安堵の息を吐くと、悠斗は男子生徒を体の上から退かす。男子生徒は何が起こったのか理解できてない様子だ。

悠斗はそんな様子の男子生徒の無事を唯見て確認すると、何も言わずにこちらへ駆け寄ってくる未造と空洞の元に戻っていく。

どうせ説明しても意味が解らないだろうから。どうせ説明しても不気味がられるだけだから。

ノーマル
普通には理解不能の能力を保有しているクラス。それが十三組。

トンツと軽く地面をつま先で小突くと、どのようなベクトルを操作

したのか、陥没していた地面が下から押されるように浮き上がって元のように戻った。

「悠斗、大丈夫!？」

「もち。俺がそうそう怪我なンてするかよ。」

「そっか、そうだね。」

「おら、時間ねーぞ。早く行くぞ!。」

「あ、空洞待てよ、今行くから。」

そして何事も無かったかのように彼らは去っていった。彼らの功績を見ていたものは、助けられた男子生徒と、屋上にいたもう一人の男子生徒だけだった。

「……なんだろう、視線がいつもと違う気がする。」

「悠斗もそう思う?。」

いつもの登校……なのだが、今日はいつもとは少し違っていた。何が違っているかというと、他の生徒からの視線が少し違っていた。

昨日までの視線は嫉妬や恐怖などの負の視線だったのだが、今日はなんというか、それが少し和らいだというか、唯注目されているといった感じなのだ。

むず痒くなりながら、悠斗と未造は歩を進める。と、二人の前に生徒が立ちふさがった。それは昨日助けた男子生徒だった。

「ん、何か用か?。」

悠斗はポケットから小さい棒付きキャンディーを取り出しながら男

子生徒に話しかけた。男子生徒は少しの間もぞもぞしていたが、口を開いて、

「あ、あのさ。昨日は助けてくれてありがとう。」

「……何だ、んな事か。気にすんな、次からは気いつけるよ。」

そんな感謝の言葉を手をヒラヒラさせながら軽く受け流すと、悠斗は未造を引き連れて校舎の中に入っていた。

呆然とする傍観者^{生徒たち}。恐れていたはずの十三組の生徒が、誰かを助けた？ どうして？ 何故？ なんで？

グルグルと回る思考の中、笑いながら下駄箱で靴を変える十三組の二人が目に入った。

もしかしたら彼は、彼らはいいい人なのかもしれない。自分達が勝手に勘違いしていただけなのかもしれない。

カチリ、と悠斗達の学園生活^はが変わる音が聞こえた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5317o/>

十四組の断罪者

2011年9月19日00時22分発行